慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ヴィンデルバントに於ける歴史学と歴史の発展
Sub Title	
Author	高村, 象平
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1932
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.26, No.1 (1932. 1) ,p.73- 138
JaLC DOI	10.14991/001.19320101-0073
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19320101-0073

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

諸國の財政が屢〻破綻を示し財政整理の必要を見たのであるが、其は國民の負擔能力の限界外に逸出したる現實の例であらう。從て其等の國の財政整理の前後には其國の財政を支配する諸條件の作用が明瞭に表はれ居る筈であると考へる。殊に租稅に就て云へば、他の租稅原則に比して、最も可動的なる國民經濟的條件の作用は殊に强く表はれて居る。此故にも、現代財政に於ける租稅經濟論の重要性の殊に大となるものと考へるのである。

附記　筆者は右の意味に於ける現實の租稅制度として英國及獨逸の租稅の經濟的作用・影響の研究を企圖したのであるが、其前文として二三の事項に冗長の論を續けて居る間に期日の切迫と準備の不充分のために、主要部分を他日に讓つて前文のみを提出するの已むなきに到つた。唯〻前文のみを以ても二三の事項について自己の若干の疑問に就て讀者の教を乞ふことが出來やうかと思ふ。

ヴィンデルバントに於ける歷史學と歷史の發展

高村象平

本稿に於ける課題は二つ。第一はヴィンデルバントの歷史認識論であり、人類史論が其の二である。本稿第六節を境として、此の兩者は各々其の領域を占める。そして、此の二つによつて、ヴィンデルバントの歷史哲學は作り上げられると概言することが出來るのである。

前書き

筆者は他の機會に、カアル・メンガアが一八八三年の方法論的著作に於て、歷史と理論とを區別したけれど、尙歷史的科學の課題たる個別者一般の認識に就ては說くところ尠きことを述べた。(1) メンガアの全勞作は、フォン・シェルティングも云ふが如く、經濟的「法則」と自然科學的「法則」とが完全に論理的同一性を有するものなることを擧示するに努めるものである。(2) 如何にもメンガアは學問の分類に當つて、認識對象の相違に基いては之を爲さず、學的認識の論理的形式的區別によつて、即ち同一の現實在を觀察する觀點の異別に之を求めた。然かも該所に言及した個別者、具體者の認識に就ては、更に深くその考察を進めることを爲さなかつたのである。「人間の精神が個

別者の認識に際して有する關心」は、彼にとつて「自ら明白」(3)であつた。そして個別化的認識の形式的本質は何等問題としなかつたのであつた。

此の個別者一般の認識を問題としなかつたこと及び歴史と理論との關係に就ての精確なる尋究を缺くことに關説して、由良氏は其の近業に「彼(メンガア)の理説は眞に粗暴、且急進的な一の二元論たるに止まる」(4)と云はれてゐる。乍併メンガア自らは其の理論的展開を進めなかつたとは云へ、既に其の理説には明らかに尠くとも一つの問題が芽ばえてゐたのであつた。即ちメンガア自身は見なかつたけれど、後年ヴィルヘルム・ヴィンデルバント、ハインリッヒ・リッカアト、マックス・ヴエバア等の採り上げた學問方法論の問題を、其の論作の中に藏してゐたのである。(5)　本稿に於て筆者は、此の問題史的展開の中、ヴィンデルバントに於けるものの若干を最初述べたいと思ふ。即ちヴィンデルバントは學問方法論上、決定的な轉回點を意味するものであることを先づ解明したい。

上記メンガアの著作の公けにされた一八八三年は亦、カアル・クニイスの「經濟學」の再版が改題されて現はれた年である。そしてクニイス自らが同書に於て「理論的部門を精神科學と自然科學とに分類(ヘルムホルツの辯護するところである)することが多くの承認を得てゐる」(6)と云へるに徴して明かなるが如く、當時に於ては尚、ヘルムホルツを其の代表者の一人とする自然科學の影響が、多方面に著しく及んでゐた。十九世紀中葉以降に於ける自然科學の發達は、それに影響された世界觀の必然的な結果として唯物論の優勢を齎した。然かも此の問自然科學から哲學に入らうとする實證主義に對し、更には唯物論的傾向の反動として「カントへの復歸」が叫ばれるに至つたことは是亦周知の事實であらう。(7)　即ち吾々は一八八三年に於て、自然研究の影響と、認識の根柢の哲學的研究への自覺とが、相錯綜してゐるのを見るのである。加之ならず此の年には亦、ヴィルヘルム・ディルタイによつて「歴史的理性の批判」が求められた。(8)　このことは歴史に於ても認識論的基礎付けが必要とされた爲めであり、それは十九世紀に於ける歴史學の發展に相應ずるものに外ならない。從て其の後九四年にヴィンデルバントがシュトラスブルク大學總長就任講演に於て、歴史と自然科學との方法論的峻別を明確に表明したことは、何等特筆するに足るものでなく、寧ろ生の哲學に對して、學の哲學の進展の遲きことを指摘され得るものであるかも知れない。或は又ヴィデルバントの學問の分類は、ひとりメンガアよりの問題史的發展に於てのみ考察せらるべきでなく、當時の學問領域全般の風潮に歸すべきものであると做されるかも知れない。

それは確かである。如何なる超然たる哲人と雖も、彼の生活する社會を離れては何事も爲し得ないのであるから。孤立せる個人の如きは一のフィクティオンたるに過ぎない。然かも尚、人間が彼を産んだ社會によつて制約せられるといふことは、彼を繞る現在の社會のみでなく、過去の人類の成果も亦彼に影響するところあることを意味する。乍併それはたゞ其の意味に於てのみ認めらるべきものである。例へば吾々がプラトンの、又はカントの理説を學んで之を或る問題に對する自己の研究にとり入れる場合、そこに此等偉大な哲學者の到達した成果が、吾々の其の問題解決に影響を及ぼすところあることが認められる。然しそのことを以て直ちに吾々とカント又はプラトンとの間に、内的關聯があるとは斷定し得ないところである。其の問題に對する解決の仕方を問題史的に見ることは甚だ早計であるといふよりは、寧ろ爲し得るものでないと云はねばならない。此のことは注意さるべきである。筆者は更に之をヴィンデルバントに關する具體的な例證を以て、其の然らざる所以を詳かにしたいと思ふ。

それは次の如きことである。グラウは、個別的事實を求める歴史科學と普遍的法則を求める自然科學とを對立せしめるヴィンデルバントの見解の本質的根本思想は、既にドロイゼンが其の Natur und Geschichte, abgedruckt in: Grundriss der Historik, 1868, S. 63 ff. に於て爲したところであると做してゐる。(9)　そして之と同じことをフアディナント・テンニイスも云つて居り(10)、ゾムバアトも亦其の近著に於て論じてゐるのである。(11)　然しとのことは、ドロイゼンがヴィンデルバントに先んじて、此の問題に彼の立場からして一の解決を與へたといふに止まり、決してドロイゼンよりヴィンデルバントへの問題史的意義の存するものでないことを筆者は云ふのである。兩者の間に内的發展の跡を見出し難きことを、各々の問題提出の樣相の相違すると

さからして述べるのである。

ドロイゼンにあつて、現象世界は或は自然と見られ或は歴史と解せられるのである。現象の觀察に於て、「變化するものゝ中に相等なるもの(das im Wechsel Gleiche)」を把ふるときそれは自然であり、「相等なるものの中に變化するもの（das im Gleichen Wechselnde)」を捉ふるは歴史である。(12)　即ち自然と名付けらるる現象は個別的な形式に於て存在するものであるけれど、多くのものの中に於ける反復する同一なるものに着眼して、そこに自然なる現象を見るのである。之に反して歴史は、「先件が後件中に繼續され補充され擴大される連續である。それは復歸する圓の連續、反復する周期の連續ではなくして、無限の系列である。」(13)繼起、進歩の觀點の下に於ける現象の把握が歴史なのである。斯の如くドロイゼンは歴史と自然とを對立せしめてゐる。然かも尙彼はたゞその差異を明かにするだけには止まらなかつた。彼は歴史的研究と歴史的知識との法則を確定せんとして、其の研究に力を注いだのであつた。(14)　その努力の結晶として吾々に Grundriss der Historik. なる一書が送られてゐるのである。然らば玆に蓑の問題、即ち此の歴史の本質と方法とに關する反省、自然と歴史との對立が、後年のヴィンデルバントの尋究するところとの間に、内的發展の跡を辿り得るものであると云へるのであるか。之を筆者は吟味しなければならない。

其の表題に明かなるが如く、彼ドロイゼンにあつて問題となつたのは Historik であつた。それは他の言葉を以てすれば Methodik der Geschichte. と云はるべきものである。それは歴史學の研究方法であつた。彼自らが云つてゐる、Die Historik ist .... nicht eine Philosophie (oder Theologie) der Geschichte, ... am wenigsten eine Poetik für die Geschichtschreibung. Sie muss sich die Aufgabe stellen, ein Organon des historischen Denkens und Forschens zu sein (15)と。即ち彼の採る全態容の中心たるものは、歴史研究に當つて歴史家の採るべき方法の考察なのである。寧ろそれは實際的手段を取扱つたものであると極言出來よう。云はゞ歴史研究の道案内たるものが、彼の論作の中樞となつてゐるのである。之に反して筆者が本稿に於て問題とするヴィンデルバントの說くものは、歴史學の概念構成を取扱ふ歴史學方法論であつた。それは學問論としての方法論である。Methodik ではなくして Methodologie である。ヴィンデルバントにあつては、歴史學の論理的構造の省察が問題なのである。此の兩者即ちヴィンデルバントの論ずる Methodologie とドロイゼンの述べる Methodik との相違をより明かにする爲めに、筆者は敢て次の如く附言するであらう。何となれば此の兩者の相違は未だ尙等閑視され、從て兩者は混同され、場合によつては同一視さへされてゐることが屢々あるからである。

では Methodologie (方法論)とは如何なるものであるか。筆者は爰に於てフォン・シェルティングの簡潔にして然かも要を得た記述を想起する。彼は云ふ、「方法論は其の特殊の認識領域を有し、其の存在權を實際的利益(praktischen Nutzen) の中に用ふるのではなくして、經驗科學に對する效果的作用の中に基礎を有する」(16)と。即ち方法論は或る限られた經驗世界の領域を其の認識目的とするのではないのである。

方法論の認識目的は、事實學(sachliche Wissenschaft)が其の認識を形式化するに際し、或はそれが認識に達せんが爲めに手段として役立つ概念の論理的構造なのである。即ち方法論は、事實學に於て勞作せられる對象の認識の認識であると云はねばならない。換言すれば、事實上行はれる學的勞作の論理的本質に就て、如何にそれがあるかを反省するのが方法論なのである。

然らば Methodik (方法)とは何を云ふか。再びフォン・シェルティングの言葉を借りれば、「方法といふ語は、種々な事實領域に應じて甚だ多くの方法的技術學(methodische Kunstlehre)が與へられ得ることを、確かに否定され得ないといふことを意味する。」(17)即ちそれは學の研究に當つての實際的方法である。爰に於て此の Methodik と、本來的の學的認識の理論たる Methodologie とは、全く質を異にするものであることが解せられるであらう。後者は「經驗科學に對して其の目的を設定するものでもなく、又常にひとり正しき道を與へ得るものでもない。それがひとり爲し得ることは、事實的實證に對して論理的意識を實現するにある。即ち其の論理的構造を分析するにある。」(18)

當てカアル・ラムプレヒトは、フォン・ベロオの論文 Die neue historische Methode. に對する批評の中に於て次の如く云つた。Da ist denn zunächst klar, dass eine Methodologie die Wege wissenschaftlichen Denkens weisen soll : das liegt schon im Worte. Sie soll also eine Führerin sein des wissenschaftlichen Denkens in bisher unbekannte Gebiete. (19)と。乍併以上の記述の後では、このラムプレヒトの考察の誤つてゐることが明瞭であらう。然かも尙、方法論を以て學問研究の道案内であると做すかかる見解は、未だ後を絶たないものの如くであるが、方法論は此の云はゞ功利的觀點を決して滿足せしめるものでないのである。此の見

解たるや一に Methodologie 及び Methodik の孰れもが「方法」なる語を冠するが爲めの、兩者の混同より生ずるところのものであらう。然しこの兩者は實に相異れる二つのものなのである。而して又かかる功利的見解が當然齎すであらうところの、方法論が學の進歩には何等寄與するところ無しとの結論は、同じく否定せられねばならない。方法論は學の進歩に對して十分に意義を持ち得るのである。それは如何にしてか。

「方法論の著しき實際的效果は次のことに存する。即ち方法論によつて齎された洞察により、或る事情から生ずる學的概念構成の論理的本質に於ける過剩な誤れる批判を免れ得るのである。乍併このことは原則的事實を少しも變ぜず、方法論の構成的中心と相並んで、縱令多くの價値あるものと雖も、原則的觀點の下にあつては、單に第二義的且附屬的役割を演ずるのである。從て原則的には、方法論は一切の學的仕事（Betätigung）一般の如く、世界に就ての人間の進歩しつつある知的解明への同じ努力と一致するのである。」(20)

以上、稍長きに亙つて方法と方法論との峻別をなしたのは、一にドロイゼンとヴィンデルバントとが自然と歴史なる問題解決に同樣なる結果を得たとは云へ、そこには內的關聯の存することなきを云はんが爲めであつた。再言する迄もなく、ドロイゼンが其の著作に於て問題としたのは方法であつた。ヴィンデルバントに於けるものは方法論であつた。而して此の方法と方法論とは相異る二つのものなのである。即ち一は歴史研究の道案內であり、他は歴史認識論であつた。從て兩者は各々問題提出の必然性を異にすることを注意せねばならないのである。勿論ヴィンデルバントにドロイゼンの影響がなかつたとは斷言出來ないであらうし、又言ひ得るものではない。何となればヴィンデルバントは其の學的生涯の最初を、否其の多くを歴史的研究に獻げたのであるから。更に又學問論の領域に於ては、メンガアの影響も何等かの程度に於て受けたとは確かであらう。乍併此の中、前者相互の關係に就ては、よしやヴィンデルバントとドロイゼンとが同じ結論に到達したと云つても、それは前述の理由からして單なる外的類似であると云ひ得るに過ぎないと筆者は云ふのである。ヴィンデルバントにドロイゼンの影響ありとしても、兩者の理說を問題史的に見ることは筆者の甚だ躊躇するところである。寧ろ卒直に云へばかかる關係付けを否認せざるを得ない。

或は亦次の如く云はれるかも知れない。ドロイゼンは歴史研究の方法のみを論じてゐるのではなく、更に進んで歴史の本質に對する哲學的反省をも試みてゐるのである、從て彼の立場とヴィンデルバントのそれとは、其の間何等の階梯の在ることを認め得ないと。如何にも彼はその著作に於て、歴史の理念に關する哲學的反省を爲してはゐる。其の Historik は Poetik たるに止まらなかつた。例へば彼は「倫理的世界は無限の生成であり向上である。かかる運動の繼起を觀察すると、倫理的世界が吾々には歴史であり、かかる生成及び發達に於て、一歩一歩歴史の理解は廣まり且深まる」(21) とし、更に歴史の理念に言及して、「人間は理念がなければ人間でなく、理念は人間や民族や時代の共同の勞作に於て、進歩的歴史に於て始めて生成し發達し向上するのである。歴史の生成、發達とは理念の展開である」、(22) と云つてゐる。此の歴史の理念に關する哲學的反省が、彼をして自らかのヴィルヘルム・フムボルトを歴史學のベエコンである(23) と云はしめ、又人々が彼をフムボルトに相並んで歴史哲學者であると看做す所以である。若しも歴史の理念を論究することが歴史哲學者の唯一の仕事であるならば、ドロイゼンは當然歴史哲學者の一人に數へられるであらう。乍併吾々が彼の著作に於て見得るそれは、僅かに其の片鱗に過ぎないことを遺憾とせざるを得ない。彼は單なる經驗史家に止まるものではなかつたとは云ひ得られるであらう。(24) とは云へ彼の取扱つた Historik は決して歴史認識論ではなかつたとも云ひ得るのである。從て其の中に縱令何等か哲學的反省を企てたからとて、直ちに彼を哲學者であるとと云々することは如何であらうか。

問題提起の仕方の相違から、筆者はドロイゼンとヴィンデルバントとの間には何等內的關聯の存することを見得ない。(25)

之に反してメンガアからヴィンデルバントへの展開は、其の意義を全く異にする。端的に云へば、メンガアの取扱つたものは Methodik ではなくして Methodologie であつた。從てメンガアに於て、ヴィンデルバントへの問題史的意義を認めることは、其の間に何等異說を挾むべき餘地を存さないのである。筆者はフォン・ゴットルの次の言葉を採る。曰く、「カアル・メンガアは彼の Untersuchungen の最初の頁に、明瞭に一般者の認識と個別者のそれとの對照を力說した。從て一八八三年に於て、其の十年後專問的論理學に於ける一つの新思潮の嚮導思想として現

はれた思想が先行したのである」(26)と。此の十年後に於ける考とは附言するまでもなく、ヴィンデルバントのシュトラスブルク大學總長就任講演を指す。

それが如何なるものであるかは、次節に於て筆者が彼ヴィンデルバント自らの言葉に基き述べるところである。そして此の考が、單にメンガアとの關聯に於てのみ見らるべきものでなく、即ちヴィンデルバント自らが始めて世に問へた一八七〇年に於ける論文「偶然論」に含まれた思想の必然的展開であつたことは、其の次に於て說かれるであらう。

(1) 拙稿「歴史學方法論の一面」本誌第二十五卷第六號所載。

(2) Alexander von Schelting, Die logische Theorie der historischen Kulturwissenschaft von Max Weber und im besonderen sein Begriff des Idealtypus, in Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik, Bd. 49. Heft 3. (1922.) S. 641.

(3) Carl Menger, Untersuchungen über die Methode der Socialwissenschaften und der Politischen Oekonomie insbesondere. 1883. S. 4.

(4) T. Yura, Geisteswissenschaft und Willensgesetz. 1931. S. 7.

(5) 上掲、拙稿參照。

(6) Karl Knies, Die politische Oekonomie vom geschichtlichen Standpuncte. Neue Aufl. der Politischen Oekonomie vom Standpuncte der geschichtlichen Methode. 1883. S. 5, zit. nach F. Lifschitz, Die historische Schule der Wirtschaftswissenschaft. 1914. S. 141.

(7) Vgl. Karl Vorländer, Geschichte der Philosophie. 7. Aufl. 1927. Bd. 3. S. 127-57.

(8) Wilhelm Dilthey, Einleitung in die Geisteswissenschaften. 1883.

(9) K. J. Grau, Wissenschaft und Wirklichkeit. Preussische Jahrbücher, Bd. 181. (1920.) S. 44 f., zit. nach Erich Becher, Geisteswissenschaften und Naturwissenschaften. 1921. S. 131. Anm. 1.

(10) Ferdinand Tönnies, Zur Theorie der Geschichte, in Archiv für sytematische Philosophie. Neue Folge. Bd. 8. Heft 1. (1902.) S. 31. Anm. 1.

(11) Werner Sombart, Die drei Nationalökonomien. 1930. S. 167-9.

(12) Johann Gustav Droysen, Natur und Geschichte, in Grundriss der Historik. Neudrucke. 1925. S. 71-2

(13) Droysen, a. a. O. S. 72 u. 73.

(14) Droysen, Kunst und Methode. in Historik. S. 86.

(15) Droysen, a. a. O. S. 12.

(16) von Schelting, a. a. O. S. 624.

(17) von Schelting, a. a. O. S. 625.

(18) von Schelting, a. a. O. S. 625.

(19) Karl Lamprecht, Die historische Methode des Herrn von Below. 1899. S. 9.

(20) von Schelting, a. a. O. S. 626.

(21) Droysen, a. a. O. S. 11-2.

(22) Droysen, a. a. O. S. 23.

(23) Droysen, a. a. O. S. 6.

(24) 經驗科學者と哲學者とが同じき結論に達したといふことは、其の問題が正しいといふことの斷定に對して論據を與ふるものたるのみ。

(25) このことはザロモン・マイモンと左右田博士との間に於ても云ふことが出來るであらう。

(26) Friedrich von Gottl-Ottilienfeld, Zur sozialwissenschaftlichen Begriffsbildung. I. Umrisse einer Theorie des Individuellen. 1906, in Wirtschaft als Leben. 1925. S. 447.

學問を分類するに、學問の研究對象の相違に基いて之を爲すことは最も理解し易いものであらう。そして此の標準を以てする分類の代表的なものとして、ヴントのそれを擧げることは何人も異議を挾まないであらう。ヴントは、學問を純粹形式科學と實質的經驗科學とに大別し、前者に數學を、後者に自然科學と精神科學とを屬せしめてゐる。然し學問の基礎を明かにし、學問を成立せしめる方法を明かにせんとする立場からしては、此の分類の標準は當を得たものではない。殊に對象が認識によつて成立するのであつて對象と認識とは獨立するものではないと見る立場からは、かかる分類は何等意義あるものとは做し得ないのである。而して學問の理說たる方法論的見地から學問を分類した後者の一人として、ヴインデルバントは記憶せられねばならない。彼は實に學的認識の論理的區別を導いた者の一人である。彼は學問の分類は其の對象によるのではなく、その方法によると說いたのであつた。

ヴインデルバントは學問を理性科學と經驗科學とに大別する。前者には數學と哲學とが屬するが、孰れも直接に經驗的所與の認識を目的とするものではない。然し玆で問題とするものは之でなく、ヴインデルバントが其の講演「歷史と自然科學」に於て詳細に說いた經驗科學の分類に關するものである。勿論經驗科學は現實在の認識を其の課題とする。「從て其の形式的メルクマアルは、此等の科學が其の結果を基礎付ける爲めに、普遍的公理的前提と凡ゆる認識に對して等しく必要な規範的思惟の正當性と共に、知覺による事實の確定を絕對的に必要とするといふことである。」(1)

此の實在の認識を目的とする經驗科學の分類は、ヴインデルバントの當時にあつては、尙自然科學と精神科學とを對立せしめることが一般に多く行はれてゐた。之に對してヴインデルバントは次の如く批判したのであつた。即ち學問分類の原理を自然と精神の如き內容的對立、對象の對立に求めることは、古代的思惟の末期以降より傳統的に行はれた區別の踏襲であつて、「最近(勿論十九世紀末を指す)の哲學の思潮と認識論的批判の成果とを正しく批判する限り」、「斯の如き區別は最早確實且つ自明的なものとして承認することが出來ないから、それは其の儘分類の基礎とすることを得ない。加之ならずかかる對象の對立は、認識方法のそれと相一致するものでない。」(2) ヴントの分類に於ける精神科學の基本科學は心理學である。いかにも其の對象から見ればそれは全く精神科學であらう。乍併心理學に於ける方法的取扱は全く自然科學のそれであり、自然科學と同じく「事實を確定し蒐集し加工することによつて斯かる事實を支配せる普遍的合法性を理解せんとする觀點の下に立ち、」その求むるところのものは自然科學と等しく、生起の法則である。(3) 即ち孰れも其の認識目的の形式的特性に關しては論理的同一性を有するものである。從て方法論的分類よりすれば心理學を以て精神科學と做すことは誤りと云はねばならない。

何となれば精神科學は、「時間に於て限られた一回的現實在の、單一にして多少とも延長ある生起を、完全に剩すところなく敍述することを其の目的とするものなのである。」それは「一回的現實在

として表示された人間生活の形象を、それぞれ其の事實性に於て再現し理解することを、其の認識目的とするものである。」(4) 爰に於て論理的概念に基き、方法論的に經驗科學を分類するならば、一は心理學を含む自然科學であり、他は精神科學であると云はねばならない。乍併この「學問の認識目標の形式的特質を以て分類の原理」(5) とするヴィンデルバントに於ては素より、自然科學に對峙する經驗科學の他の一部を、精神科學であるとはなさないのであつた。

即ち心理學を自然科學の中に入れた上で、自然科學と歴史科學とに對立せしめるのである。或は、一は現實在の認識に於て普遍的法則を求める、「自然法則の形式に於ける普遍者を求める、」「現實的生起の常に同一なる形式を觀察する」ことからして、「法則科學」、又は「法則定立的科學」と名付け、他は現實在の認識に於て特殊的歴史的事實を求める、「歴史的に規定された形態に於ける個物を求める」、「現實的生起の一回的な其れ自身に於て規定された內容を觀察する」ことからして「事件科學」又は「個性記述的科學」(6) と呼ぶのである。

此の經驗科學の第二の群は歴史的諸學科の全範圍を蔽ふものである。即ち自然研究と歴史とが相對立する、そして此の形式的方法的對立が二種の學問の區別を規定するのである。兩群に於ては事實の認識と變更との傾向を異にする。「自然科學と歴史との區別は、それぞれの認識に適應せる事實の選擇が問題とせられる時に初めて現はれるのである。」(7) 再言する迄もなく、前者は法則を求める。特殊者の確立より始めて普遍的關係の理解に至る。「自然科學者の觀察する個別的所與對象は、單に個別的所與對象である限り、彼にとつて何等學的價値あるものではない。斯かる對象は、彼が之を類型、即ち類概念の特殊態と做し、後者から類概念を發展せしむることを合法的であると考へ得る限りに於てのみ、役立つのである。彼はたゞ合法的普遍性を認識せしめ得る如きメルクマアルにのみ注意する。」(8) 即ち自然科學的思惟に於ては抽象への傾向が優勢を占めるのである。「之に反して歴史家は何等か過去の形象に其の全き個性的形姿を附與して新たな生命を與へ、之を觀念的に現前せしむることを其の課題とする。」「其の究極目的は素材の集りからして、過ぎ去りしものの眞容を作り出し之に躍如たる明瞭性を與ふるに存する。歴史批判が與ふるものは、極めて豐富なる獨自的形態を具へ、飽くまで個性的に表現せられたる人間並びに人間生活の形像である。」(9) 從て「歴史的思惟に於ては直觀への傾向が重きを爲す。歴史家は、藝術家が彼の想像中に存するところのものに就てすると同樣の課題を、嘗て實際に存在したものに就て實現しなければならない。爰に於て歴史的創造と美的創造、歴史的學科と文學との近似が根ざすのである。」(10)

云ふ迄もなく法則定立的或は自然科學と個性記述的或は歴史科學との對立は、內容的區別でなくして方法的分類であるから、「同一對象が、法則定立的研究の對象でありながら、然かも同時に個性記述的研究の對象ともなり得ることは、可能であるし、又事實の示すところである。」(11)「極めて長き時間的經過中に於て直接に認知し得る如き變化を受けざるが故に、其の不變的形式に基いて法則定立的に取扱はるべきものも、一層遠大なる觀望の前に於ては畢竟するに或る限られたる時間に對して妥當するところのもの、即ち一回的なるものとなることがあり得るのである。」即ち爰に於て「歴史的原理が自然科學の領域に移入せられ」(12) 得る。乍併このことは歴史的方法が自然科學的方

法に還元されるといふ意味ではない。兩方法の概念的對立は依然として存すると云はねばならない。

ヴィンデルバントに從へば、個性的現實的生起の歴史形象を普遍的合自然法則性に據つて理解せんとすることが遂に可能でなければならぬと考へることは、誤りである。「生起は二種の原因を豫想してゐる。一は事物の恒常的本質を表示する無時間的必然性であり、他は或る一定時點に現はれる特殊的制約である。」(13) この特殊的制約は、事物自體の普遍的法則的本質から導き出すことは出來ない。「寧ろ此の制約はそれ自體時間的事件なるが故に、それは他の時間的制約、即ち該制約を法則的必然性に從て繼起せしめた先行的制約に再び還元せらるべく、斯くして無限に遡及せられるであらう。然るに吾々はかかる無限的系列の初項を、概念的に考へることが出來ない。」即ち、「普遍的法則に基礎を有する始元、即ち人が因果連鎖の系列を其處まで遡及し得る如き終點は存在しないのであるから、普遍的法則へのあらゆる包攝も、個別的時間的所與をその究極的根據に至るまで分析し盡すことに何等資するものではない。斯くして一切の歴史的個性的經驗には理解し難き剩餘、即ち或る言ひ盡し得ざるもの、定義し得ざるものが殘される。」(14) 此の點に、自然科學の法則定立的方法は近づき難いのである。斯くてヴィンデルバントは云ふ、「それ故に人格の深奥なる究極的本質は、普遍的範疇による分析に反對する」(15)と。從て法則定立的と個性記述的の兩方法は、孰れも認識の全體に役立つものであると云ふことが出來る。

歴史的知識は、時代から時代へ推移する毎に濃密となる文化生活の關聯を理解せしめるものであるが、此の歴史的知識の認識價値は何に基くのであるか。凡ゆる價値規定、「人間の有する一切の價値規定は、個物、一回的なるもの、無比較性に關係するものである。」(16) 然かも此の個物は孤立的所與の意ではなく、個物は一の價値系列に排列されてゐなければならないものである。「凡ゆる任意の實在が悉く皆、學問にとつての事實なのではない。學的意味に於ては、既に事實が一の目的論的概念なのである。學的事實とは、學がそれからして何事かを學び得るが如き實在の謂である。」(17) 即ち學にとつては、凡ゆる單なる事實が觀察されるのでない。それは目的原理並びに價値原理に從つて選擇が行はれるのである。それは歴史に於て特にさうである。「歴史的事實に非ざる如き出來事は、實は多く生起してゐるのである」。(18) 然かも尙歴史は單なる事實としての個物に對するものではないのである。而して歴史が具體的事實に選擇を行ふと云つても、それは自然科學に於けるが如く、普遍的法則を定立せんが爲めではない。

それは生ける價値全體の多少共本質的なモメントとして配置するのである。出來事が歴史的たる爲めには人類の價値生活に關係せしめられねばならない。之によつて歴史學の事物選擇の原理は、普遍的價値に關係せしめることであると云へよう。之が自然科學に於ける選擇原理との相違なのである。斯くてヴィンデルバントに於ては「吾々の世界形像の骨組の內部に於て、人類の回想に展開せらるる、全人類に對して價値ある個別的形象の生ける關聯」(19)を理解することが歴史研究の獨自的意義であると云はれねばならないのである。(彼の歴史認識論は後節に於てより詳細に說かれるものであることを一言する。)

(1) Wilhelm Windelband, Geschichte und Naturwissenschaft, in Präludien. 4. Aufl. 1911. Bd. 2. S. 141-2.

(2) Windelband, a. a. O. S. 142.
(3) Windelband, a. a. O. S. 143.
(4) Windelband, a. a. O. S. 144.
(5) Windelband, a. a. O. S. 144.
(6) Windelband, a. a. O. S. 145.
(7) Windelband, a. a. O. S. 149.
(8) Windelband, a. a. O. S. 150.
(9) Windelband, a. a. O. S. 151.
(10) Windelband, a. a. O. S. 150.
(11) Windelband, a. a. O. S 145.
(12) Windelband, a. a. O. S. 146.
(13) Windelband, a. a. O. S. 158.
(14) Windelband, a. a. O. S. 158-9.
(15) Windelband, a. a. O. S. 159.
(16) Windelband, a. a. O. S. 155.
(17) Windelband, a. a. O. S. 153.
(18) Windelband, a.a . O. S. 153-4.
(19) Windelband, a. a. O. S. 157.

二

前節に於てはヴィンデルバントの方法論的原理による學問の分類を其の講演「歴史と自然科學」によつて掲げたのであるが、筆者は既述の如く此の學問の分類を以て、メンガアに於けるものの展開と見るのである。歴史が自然科學に對して有する獨自性を説いたことは、ヴィンデルバントの學問分類論の最大特徴と云ふも、敢て過言ではあるまい。然かも亦、此の最大特徴は、他面に於て、彼の哲學觀の然らしめるところであり、彼の最初の著述に於ける主旨の進展でもあつた。先づ其の主意とは何を言ふのであるか。

ヴィンデルバントは一八八三年に刊行した論文集「プレルウデ・イエン」初版の序文に於て、自ら公言せるが如く彼はカントの學徒であつた。然し彼は單なるカントの亜流ではなかつたのである。彼の「カントへの復歸は、カントが批判哲學の理想を其の中に敍述した歴史的に制約されてゐる姿を單に再興すること」に止まらなかつた。彼はその言葉の通りに「カントを超越」(1)したのである。筆者は其の一面を彼の學問分類に見出すのである。

「カントに於て批判的知識學の範圍は、彼の解したる學の概念が主として自然科學の概念に歸着し限られることによつて自ら制限され」てゐた。「カントの本來の努力は、吾々が彼の全發展を辿つて指摘し得る如く、ニュウトンの自然科學、換言すれば數學的物理的理説に對する普遍的概念的基礎を發見することに注がれてゐた。故に彼の全認識批判に於て專ら問題となるところのものは自然研究」(2)であつた。此の點に、ヴィンデルバントがカントを超越した一面は存する。即ち彼は以上の如きカントの知識學に對して「原理的なる擴張と補充とを」爲したのであつた。それが、歴史的

知識を學として、以て自然研究と同位に並立せしめることなのであつた。歴史的知識とは換言すれば個物の經驗的知識である。若し彼がカントの批判的知識學を單に受けつぐに過ぎない者であつたなら、彼はカントと同じく「歴史的知識を理性必然性並びに普遍妥當性を缺ける偶然的なものと看做」してゐるに過ぎなかつたであらう。其の認識批判に於ては、歴史的知識を問題とすることは無かつたであらう。然るに「カントを理解」(3)した彼は、よく個物を取り上げたのであつた。そして其の知識を學にまで高めたのであつた。斯くて歴史科學を自然科學と全く同樣に批判の問題となしたのであつた。

即ち是に由つて明かなるが如く、ヴィンデルバントは個物を不問に附することをしなかつた。彼の學的勞作の功績の一は、此の個物への關心である。而して此の個物に關する理説の萠芽を、彼の論文「偶然論」に見得るのである。以下に於て、筆者はその一部を窺はう。

ヴィンデルバントに據れば、偶然は多くの可能性の一つなのである。「然るに一般には可能性が事實となるのは或る必然性の結果であると考へられるが、偶然は此の可能性が必然性なくして制約された現實生成なのである。從て偶然なる概念の一般的特徴は消極的なるものであり、それは必然性の否定である。」(4)此の「必然性の陰影」である偶然は、偶然と原因、偶然と法則、偶然と目的、偶然と概念との各の關係に於て明かにされるのである。

「變化は孰れも原因を有し、其の原因から必然性を以て發生する。此の因果的必然性の止んだところに偶然は生ずるのである。」(5)ヴィンデルバントは先づ因果律との關係に於て、絶對的偶然性と相對的偶然性とを區別する。例へば「之が偶然に起つた」といふ時に偶然とは無原因と考へられるから、此の場合は無原因を原因とすることになり、それは矛盾であると云はねばならない。(6)然かも彼に據れば玆に絶對的偶然の概念が潜むのである。それ自身原因によつて規定さるることなくして、因果の連鎖の中に入るのは恣意(Willkür)といふべきものである。之と絶對的偶然性とは甚だ近しい關係にある。絶對的偶然とは、制約的原因から獨立のものである。從て「恣意とは内的生起の世界に於ける絶對的偶然性に外ならない。」外的自然現象は原因によつて制約されて居るのである。「一切の諸現象、即ち一切の生起、一切の變化は、悉く因果律原理に從ふ。」(7)そこには絶對的偶然は存しない。絶對的偶然は因果的現象以外にのみ存するのである。「絶對的偶然は人間の内奥に於て、恣意として現れるのである。即ち精神の中には制約的原因とは獨立な結果が存在し得る。故にドロオビッシュの言へるが如く、絶對的自由の概念は純粋的偶然性のそれと全く同じである。」(8)絶對的偶然は因果律原因に關係なく、いはゞ自己原因によりて存在するものである。從て絶對的「偶然は人類認識の極限概念であり、斯くて思惟する精神に對して及び學に對して、更に研究を進むべき刺戟となり、學の未到の範圍を示すものである。」(9)之に對して、二つの事實が其の間に因果律の關係なく、時間空間に於て符合(coincidenz)する場合、相對的偶然とする。「若し之が例へば晝と夜との繼起の如く、兩者の間に因果關係を見出し得なくても、それは、この結果は孰れも或る共通の原因を有し、同一の必然性を以て生じ、從て常に兩者は相結合して現はれるのであるから、偶然ではないのである。「原因結果の關係も無く、共通の原因とも關係なく、相互が必然的に結合されてゐない事實の符合を、偶然と名付ける。」(11)

偶然は以上の如く、因果的必然性の否定として、無原因として觀察される。然しそれは偶然を必然性の反對として定義付けたが爲めであり、亦因果關係との聯關に於て考察したからに外ならない。而して玆に普遍に非ざる特殊の特質の一部が、ヴィンデルバントの學的關心を飄つたと見ることは牽强附會の説と做さるべきであらうか。

相對的偶然性の概念は、「實際に結合された二つの事實の連結(Verknüpfung)が必然的でないといふことを云ふものである。」而して「或る事實の出現する時、必然的に且つ如何なる場合に於ても、他の事實が現はれる連結を法則と呼ぶのであるから、蓋に無原因であるとした偶然は、無法則とも特徴付けることが出來る。」(12)乍併「世界經過の凡ゆる事實は總べて單なる結果ではない。」それは何等かの原因の結果として觀察されるのである。「然し此等は相互に必然的に結合してゐなければならないのではない。從てそれは偶然であると觀られる。此の意味に於て個別的事實は孰れも偶然として説明され得る。」(13)法則は、此の結果の形象を一定の條件の下に於て變形するものである。從て個別的事件は、法則の下に於ては必然的に制約され、個別的事件である限りに

於ては、法則の見地に於ては偶然と呼ばれるのである。「各個別的事件の特殊的規定は、法則の見地に於て偶然である。」(14)故に「學が、偶然的個別的事實の觀察によつて法則を認識する場合は、學は多數の事實の偶然的個別性の彼方に、偶然性の内部に不變的制約を形作くる共通的作用の規則を求める。之と反對に學が、法則の知識によつて個別的事實を規定する場合には、學は斯かる事實に作用する合法則的關係のみを、又は諸事件の總體を分類する不變的關係のみを反省するのであるが、其の根據を附隨條件の無數の出現の中に有する偶然的個別性は反省しないのである。」(15)斯く云ふ學とは、勿論カントの云ふ學に外ならない。一に法則を求むる學である。個物は法則的偶然と做して其の認識目標となさざる學である。ヴィンルデバントは之に滿足するものではなかつた。聽てそれは述べられるであらう。

ともあれ、以上に於ける因果的必然性は、目的必然性には何等一顧を與へることなくして考へられるものである。然しヴィンデルバントは更に目的に對する偶然性を説く。そしてそれは目的概念の意義の異なるに從て二つの場合があるのである。「目的を一切の人類行爲の根本原理」であると做す場合に、「人類行爲の範圍に於て、目的によつて制約されないものが考へられるならば、それは偶然であると做される。」次に「目的を創造原理として觀察し、この原理の下に世界經過の機構並びに人類の意志行動と離れた自然的生起が從ふと見る」ならば、「斯かる合目的的規定に一致せざる一切の機械的結果は偶然と考へられる。」(16)乍併爰に於ては、偶然とは要するに「人類の、個物に對する觀察の一現象」(17)なのである。

「偶然は、凡ゆる場合に於て吾々の觀察の原理であつて、生起の原理ではないのである。それは、個物が何等かの方法に於て普遍より分たれる限り、個物の見方(Anschauungsweise)である。」(18)それは普遍に對する實在原理(Realprincip)たることを得ないのである。「論理的意義に於ては、定義に含まれざる特殊のメルクマアルは、普遍概念に對してのみ偶然である。之に反して個別概念にとつては、論理的に一切のメルクマアルは、等しく必然的である。」「現實世界には、個別概念に相應する本源(Wesen)或は事實のみが存在する。從て論理的偶然性は、吾々の認識の普遍概念に對してのみ妥當する。」(19)即ち、概念を構成するに當つて、一群の諸現象の共通的メルクマアルをとつて、其の普遍的類概念とするのであるが、各個別概念の有する特殊的メルクマアルは、縱令それが各個別概念にとつて必然的な構成要素であつても、尙前者即ち類概念に對しては偶然と認められるのである。從て偶然性は概念構成過程に於ける抽象によつて存するものであると云へる。個別概念は普遍概念に對して偶然である。そして此の偶然は亦、個體の特質を形作るところなのである。

ヴィンデルバントの「偶然論」の結論は、次の言葉を以て始まる。「すべて人類の思惟によつて普遍者と特殊者とが分たれるところでは、偶然性の現象が生ずる。現實世界は普遍者と特殊者との完全なる一致(Identität)として、共通の作用の内的統一を知るのみである。」「この普遍者と特殊者との現實の一致は、思惟必然的要請とされねばならないのであるが、人類の理性は之から離れてゐて、之を充足するに至らず、寧ろ思惟過程の抽象的性質によつて、常に普遍者と特殊者との區別から始めて、該一致を理想として之に漸次に近づくといふのが其の最高の行爲である。」(20)

既述の學は、一群の現象中に共通のメルクマアルを求める。乍併其の體系の中に於ては、個物を排斥するのではないのである。個物は學によつて、「普遍者の生命ある實現として」解され又、「世界經過を以て之を規定する理性の繼續的示現」と見られるのである。

「偶然なるものの完全なる止揚は、一瞥を以て諸形態の全世界を把握し、且一鼓動を以て諸生起の全世界を透徹する無限の精神にとつてのみ、可能であると云へよう。然かも一切の學的、道德的、藝術的生活は、偶然性に對する倦まざる且少くとも個々の點に於て常に勝を得つゝある戰であることを確信し得るのである。」(21)

之がヴィンデルバントの言葉である。現實世界には偶然的個體が常に存在する。「偶然的なるものが類(Gattung)と個體(Individuum)との分岐點」(22)なのである。若しこの個體を單に個體として

放置するに止まるならば、ヴィンデルバントの學的寄與はさまで識者の注意を惹くことはなかつたであらう。然し事實は之と反する。現實世界に存在する個物は、單なる偶然的なものとしてのみ看做すことを得なかつたのである。其の知識を、理性必然性並びに普遍妥當性を缺く偶然的なものとして見るに止まることを得なかつた。彼が上記の「偶然と法則」の項の下に問題とした學は、云ふ迄もなくカントの、從て亦其の時代に於ける學である。然かもヴィンデルバントはよく「カントを理解」したのであつた。即ち彼は「偶然論」の結辭に於て見らるるが如く、現實世界に存在する個體的偶然に對する倦まざる戰に、人類の努力を見出したのであつた。人類の努力は此の偶然の究明に向けられるのである。之を彼は確信したのである。茲に彼が「カントを超越」した一面を見ることは、決して理り無き言説ではあるまい。

個物に對す彼の關心は以上の「偶然論」によつて明かである。然かも彼にあつて、それは關心のあることを示すだけのものではなかつた。其の「偶然論」は單に偶然の諸意義を明かにしたものとのみ解さるべきものではない。軈て此の個物は知識の對象とさるべきものだつたのである。その知識は學にまで高められ、經驗科學の一つとして、即ち自然科學と相並んで存在すべき學として見らるべきであるとの理説となるものであつたのである。約四半世紀の後に、自然科學と歴史學とを區別すべきを説いた講演は、確かに劃期的なものである。それは方法論上に於て、メンガアよりの展開と見らるべきものである。然しそれはヴィンデルバント自身にとつては亦、此の「偶然論」に於て芽生えたものの(23)結實だつたのである。

「歴史と自然科學」に於ける學問分類論は、若しヴィンデルバントが既往の哲學にとらわれて、それより一歩も出でないのであつたならば、到底爲し能はざるところのものである。彼が單なるカントの學徒に過ぎなかつたならば、カントに於ける學の概念は依然としてそのまゝ祖述されるに止まつたであらう。然し彼はよくカントの學の概念を擴張し補充したのである。云ふまでもなくカントの學の概念は、カントの哲學の然らしめるところである。從て此の擴張と補充とは、カントを超越したる哲學を有して、始めて可能たるべきものである。爰に於て、ヴィンデルバントの學問分類はヴィンデルバントの哲學によつて始めて爲し得ると云はねばならない。即ち彼の「カントを理解」したる哲學を知つてこそ、其の區別の理説は眞に解さるべきものである。由つて筆者は其の解明を直截ならしむるが爲めに、ヴィンデルバントがカントの哲學を如何に解したかに一顧を與ふる要の存することを知る。素よりそれは瞥見に過ぎない。然し茲に提起せられた問題の理解に役立ち得るものたらんことに、筆者は努めるであらう。

(1) Windelband, Präludien. 4. Aufl. Bd. I. S. IV.
(2) Windelband, Über die gegenwärtige Lage und Aufgabe der Philosophie, in Präludien. 4. Aufl. Bd. 2. S. 13-4.
(3) Windelband, Präludien. Bd. I. S. IV.
(4) Windelband, Die Lehre vom Zufall. 18/o. S. 4-5.
(5) Windelband, Zufall. S. 56.
(6) Windelband, Zufall. S. 6.

(7) Windelband, Zufall. S. 17.
(8) Windelband, Zufall. S. 7.
(9) Windelband, Zufall. S. 21.
(10) Windelband, Zufall. S. 22-3.
(11) Windelband, Zufall. S. 24.
(12) Windelband, Zufall. S. 26 und 27.
(13) Windelband, Zufall. S. 29.
(14) Windelband, Zufall. S. 30 und 31.
(15) Windelband, Zufall. S. 51-2.
(16) Windelband, Zufall. S. 56-7.
(17) Windelband, Zufall. S. 68.
(18) Windelband, Zufall. S. 69.
(19) Windelband, Zufall. S. 70.
(20) Windelband, Zufall. S. 78 9.
(21) Windelband, Zufall: S. 80.
(22) Windelband, Zufall. S. 75.
(23) 「偶然論」に於ては其の要所要所に、トレンドレンブルクの理説の引用を多く見るのである。

三

ヴィンデルバントは、カントの哲學を文化哲學と解するとき、「カントを理解」する所以であるとしたのであつた。それは如何にしてであるか。云ふ迄もなく、此の爲めにはヴィンデルバントの哲學を知らねばならぬ。然し筆者は便宜上、彼のカント哲學に對する解釋を最初述べることにしたい。

ヴィンデルバントに據れば、カントの不朽の功績は綜合的意識の發見である。「一方に現實があり、他方に表象がある。そして若し表象が認識たるべきならば、それは現實の摸寫である。之が即ちカント以前の哲學並びに通常の考へ方全體の根本豫想」であつた。「表象が斯の如きものであり得るかどうか、如何にしてさうであり得るか。之がカント以前の認識論の問題」(1) であつた。乍併、一七八一年に純粋理性批判が公けにされてから、哲學的意識が世界を與へられたもの、意識に反映されたものとして考ふべきであるといふ如き解釋は終りを告げたのである。「吾々が所與と看做す一切には、既に吾々の理性活動が潜んでゐるのである。從て事物に對する吾々の認識權利は、全く吾々が該事物を吾々に對して初めて創造するのであるといふ見解に基いてゐる。吾々は吾々が體驗すべき世界を、先づ吾々自ら自己の所有としなければならない。このことは吾々が必ず選擇を體驗し又之を必ず秩序ある關聯に於て體驗し得るといふ事實、及びこの選擇並びに秩序の原理は、たゞ吾々の意識の構成そのものに於て求められ得るといふ前提に基く。吾々の體驗する世界は吾々の所爲 (Tat) である。」(2) 乍併斯の如き、廣大な世界から經驗的意識に入り來るものは僅かにその一小截面に過ぎないといふこと、又斯の如き經驗は各人に於て夫々各自の體驗の閲歴に從ひ特殊の仕方で構成されるといふことに關しては、敢てカントの所論を俟つまでもないことであつた。カントに於て特筆すべきものは彼が「其の批判的分析に於て、如何なる權利を以て先天的綜合判斷即ち一切の經驗に

對し普遍的必然的に妥當すべき理性機能は、經驗より發生した個人意識に於て可能であるかといふ問題」(3)を出發點とする綜合的意識の發見である。

それはヴィンデルバント自らの言葉を借りていふならば次の如くである。「實際に於て經驗を構成せる普遍妥當的、必然的判斷が苟くも存在すべきであるならば、それはたゞ經驗的聯合並びに統覺の間に、先驗的綜合が支配せることによつてのみ可能である。先驗的綜合とは即ち事實そのものに基礎を有しながら、然かも經驗的意識の運動から獨立せる如き要素の綜合である。斯の如き綜合が先驗的統覺の形式であり、又斯の如き普遍妥當的綜合に依つて産出せられたる對象の他には如何なる對象も存在しないと解するのが、即ち先驗的觀念論である。」(4)

此の先驗的觀念論こそは、ヴィンデルバントに從へば、カントの批判的方法によつて生ずるところの、あらゆる文化機能の理解に對する根本的解釋なのである。

何となれば、文化とは、要するに人間の意識が其の理性的規定によつて所與から作り出したものの總體に外ならない。而して先驗哲學の樞要點は、吾々が所與として一般に其の儘受け容れてゐるものの中にも、それが普遍妥當的經驗として表明せられるときには、意識一般の法則、即ち客觀的に妥當すべき包括的理性形式に從ふ綜合が、既に存在してゐるといふカントの洞察にある。」「斯の如き理性活動は、學として知性の法則から世界を新たに創造することを意味するが、それは文化人のあらゆる實踐的及び美的態度と嚴密に同一な構造を有するものである。されば文化哲學としての先驗的觀念論の實際的統一は實に茲に存するのである。」(5) 即ち先驗哲學の原理と文化哲學との間には密接な類緣を存するのである。而して斯かる内的必然性によつて批判主義は「一の文化哲學、然かも唯一の文化哲學」となつたのである。「文化は、創造的綜合の意識に於て其の自覺に到達する。何となれば、文化は其の最も深奥な本質に從つて解せられるとき、之以外の何ものでもないからである。」(6)

斯かる觀點の下に於ては、人間の理性活動はすべて文化生活として表現せらるべく、爰に於て諸文化形象を生じ、文化價値以外に價値は存しないのである。乍併「文化哲學にとつて科學、生活秩序及び藝術等の各特殊文化形象は、理性によつて規定せられた實在の一截面、即ち無限なる實在そのものからの選擇並びに新構成と考へられる」(7) のであるから、文化と稱せられる一切のものの「究極的關聯」即ち文化價値の總體が豫想せらるべきものであると云はねばならない。

ヴィンデルバントが、一八八二年の論文「哲學とは何ぞや」に於て哲學を「組織的な（歴史的ではなく）意義に於て普遍妥當的諸價値の批判的學」(8)と解したことは有名である。然かも茲に云ふ價値とは學的範圍に於ける眞のみならず、道德的範圍に於ける善、美的範圍に於ける美をも含む(9)のである。從て此等の諸價値の批判を行ふ哲學は、當然上述の文化概念規定によつて文化哲學と解されねばならないのである。

斯の如くヴィンデルバントは、文化の概念に中心的意義を賦與して、以てカントの批判哲學を繼承したのであつた。彼は其の學說に於てカントの學徒であつたが、然かも之を補充し擴張することは常に怠らなかつたところであつた。其の一面を亦茲に見得ると云はねばならない。

上記の如く彼に於ける哲學は、其の對象より云へば普遍妥當的諸價値の學であり、其の方法より云へば批判的學である。そして彼はそれを判斷(Urteil)と價値判斷(Beurteilung)との論理的區別から、及び發生的方法と批判的方法との分岐からして、其の學的必然性を示したのであつた。筆者は此等を知ることが、彼の全理說の理解をたすけるものであることからして、次節に於て一瞥を與ふるのである。

（1）Windelband, Immanuel Kant, in Präludien. 4. Aufl. Bd. I. S. 127.
（2）Windelband, Kulturphilosophie und transszendentaler Idealismus, in Präludien. 4. Aufl. Bd. 2. S. 259-60.
（3）Windelband, Kulturphilosophie. S. 258.
（4）Windelband, Kulturphilosophie. S. 260.
カントの先驗哲學の解說書として Walter Ehrlich, Kant und Husserl: Kritik der transzendentalen und der phänomenologischen Methode. 1923. は簡明である。今本節に於て問題としてゐる先驗哲學、特に先驗的方法に就ては同書、五—二六頁に亘つて要を得て記述されてゐる。
（5）Windelband, Kulturphilosophie. S. 264.
（6）Windelband, Kulturphilosophie. S. 266.
ディルタイは云ふ「先驗哲學なる表現は、人間の創造的本性に、認識の根據、更に其の他一切の精神的作業の根據として歸せしむる一切の方向を包括する。」(Das natürliche System der Geisterwissenschaften im 17. Jahrhundert, in Wilhelm Diltheys Gesammelte Schriften. Bd. 2. 1914. S. 109.)
（7）Windelband, Kulturphilosophie. S. 270.
（8）Windelband, Was ist Philosophie?, in Präludien. 4. Aufl. Bd. I. S. 29.
此の概念規定に贊する者の一人に、マアルブルク學派に屬すと做さるるリイバアトがある。(Arthur Liebert, Das Problem der Geltung. 2. Aufl. 1920. S. 21.)
（9）Windelband, Was ist Philosophie? S. 26.

四

ヴインデルバントは次の如く語るのである「哲學の課題は、一定の對象が其の中で認識されたり記述されたり又は說明されたりされるべき判斷を、他の諸學の仕方で肯定したり或は否定したりする點に存するのではない。哲學に殘されてゐる容體は價値判斷なのである。」(1) では此の判斷と價値判斷とは如何に區別され、以て哲學は其の獨自性を有することになるのであるか。

吾々が自己の見解を肯定的に或は否定的に云ひ現はす命題は、孰れも一見同樣な外觀を有してゐる。其等は文法上は同樣な形式をとるのであるけれど、實質的には甚だ相違した意義を有する判斷及び價値判斷とに區別されるのである。

之を云ふならば、吾々が自己の見解を表現する命題は孰れも文法上の形式から云へば、主辭に賓辭が附せられる。然しこの主辭と賓辭との關係が「意識のうちに理論的に存してゐる二つの內容の間の關係として示されてゐる」場合には、それは判斷なのである。即ち判斷に於ては「かかる關係がかの二つの內容に適合するものとして或は是認され、或は否認されるのである。之に對して「賓辭が何等の理論的意識內容を意味せずして、寧ろ主辭に許與せらるべき又は拒否せらるべき或る目的、又は價値への關係を意味する」(2) 場合には、その命題は價値判斷なのである。換言すれば判斷は二つの表象內容の事實的關係を示すものであり、其の(判斷の)賓辭は類概念を表明する。(3) 之に反して「價値判斷の賓辭は表象する意識の側から同意又は不同意を言ひ現したものであり、從て何れの價値判斷も自分自身の規矩として一定の目的を豫想して居り、此の目的を承認する人に對してのみ意味と重要さとを持つてゐる。故に何れの價値判斷も、是認か否認か何れかといふ選言的形式を採つて現はれるのである。」(4)

斯の如く判斷と價値判斷とは相分たれるのであるが、「吾々の思惟が認識に、即ち眞理に向けられる限り、吾々の判斷（種々の形式に於て完成される純粹理論的な表象結合）はすべて直ちに價値判斷に從屬するのである。」何となれば此の場合に價値判斷は、

該判斷の中に完成された表象結合の妥當か又は不妥當を言ひ現はすからである。「純粹理論的判斷は本來たゞ疑問の場合にのみ即ちある表象結合が出來上つてゐるのみであつて、其の眞理價値に就ては何事も云はれてゐない謂ゆる蓋然的判斷に於てのみ與へられる。一の判斷が肯定或は否定されるや否や、理論的作用と共に價値判斷の作用も眞理の觀點の下に於て完成される。」それは直ちに價値判斷を示すのである。故に「認識の命題は皆既に判斷と價値判斷との組合せを含んでゐる。即ち肯定か否定かによつて其の眞理價値が決定された表象結合なのである。」(5)

斯かる判斷と價値判斷との論理的區別が、ヴインデルバントに於ては、特殊科學と哲學とを對象から區別するものであつた。特殊科學は理論的判斷を構成するのである。それは、歴史的記述的學科として、說明的科學として、數學的科學として構成する判斷は、「すべて或る場合には非常に特殊的であり他の場合には非常に普遍的であらうとも亦其の認識論的意義が非常に種々形づけられようとも、表象結合即ち表象された主辭と表象された賓辭との連結を含んで居り、其の連結の眞理價値は學によつて規定せらるべきなのである。」そして「諸學は認識の領域に於て絶えず肯定と否定と、是認と否認とをなし、又其の部門に於て此の活動を、一般に人間の理解に容れられ得るあらゆる對象（一切の經驗的對象）に擴張する。」(6) 從て哲學が、斯の如く特殊科學によつて占められてゐる對象の中から若干を勝手に選擇して約說することを欲するならば、哲學は單なる借物から成立つと云はねばならない。哲學が獨自性を有するが爲めには、其の客體を他の諸科學とは異るものに於て見出さねばならないであらう。爰に於て哲學は其の殘されてゐる客體として價値判斷を得るのである。然かも尙哲學が獨立的たらんとするならば、他の諸學が其の客體に對する如く之に關係してはならないであらう。即ち哲學は價値判斷を記述しても說明してもならないのである。では、如何なる出發點を有するのであるか。

爰に於てヴインデルバントは云ふ、「苟も個人或は社會に於て完成される價値判斷は、すべて心的生活の正しく必然的な產物である。それ故に此の方面から云ふならば、價値判斷は皆同樣な權利を有してゐる。即ち如何樣に現れようとも、一度現はれるならば、價値判斷は皆充足原因を持つてゐる。何となれば若し此の原因がなければ現れないであらうから。」斯くて彼は次の如く確信するのである。「或る價値判斷があり、それが事實上承認されるに至ることが全然ないか、或は普遍的にはなくとも、絶對的に妥當するといふことを、吾々は斷乎として確信してゐる。確かに、何人も己が思惟する如くに、必然的に思惟する。そして自己の或は他人の表象を、必然的に眞なるものとなさねばならない故に、眞なりとなすのである。乍併自然法則的に出來上る此の必然的な眞としての承認に對して、絶對的な價値規定があるといふことを吾々は確信してゐる。そして此の價値規定に從てそのことが起るか否かといふことは問はずに、眞と僞とに就て決定せらるべきなのである。この確信を吾々は皆持つてゐる。何となれば吾々が何か或る表象を、吾々の必然的な表象經過の根據に立つて眞であるとして說明するときには、此の說明はこの表象が吾々にとつてのみならず、他の總ての人にとつても眞として妥當すべきであると云ふ要求よりも他の意義を、少しも持つてゐないからである。表象の價値判斷が眞理の觀點の下に於て、總ての人に妥當すべきかかる絶對的な規準を豫想してゐることは明かである。そして同樣なことは倫理的及び美的の範圍にても妥當するのである」(7) と。即ちかかる價値判斷の絶對的妥當性への要求、絶對的價値判斷の可能の豫想、其處に意義ありとするのである。

かかる價値判斷の普遍妥當性は事實的なものでなく、又その必然性は因果的なものではないのである。「一の表象が眞であるか否かといふことにとつて、其の表象を如何に多くの人が承認するか否かといふことは、どうでもいいのである。故で問題とする普遍妥當性は事實的なものではなくして、理念的なものである。現實的なものではなくして、あるべきものである。價値判斷の必然性といふことに就ても之と同樣である。吾々が論理的、倫理的及び美的規定の妥當性を感ずるときの必然性は理念的なものであり、Müssen と Nichtandersdürfen との必然性ではなく、Sollen と Nichtandersdürfen との必然性である。それは吾々の表象、意志、感情が從屬してゐる自然法則的必然性によつて常に必ずしも充されないかの一段高い必然性である。」(8) ヴインデルバントは更に確信するのである。それは斯くの如き一切の論理的、倫理的、美的價値判斷が必然的普遍妥當性に對する要求を有すべきならば、其處には規範意識、即ち妥當すべきものであり又あらゆる經驗的現實が秤量さるべき理想であるところの規範意識が存するとの確信である。玆にカントの影響あることは明かである。斯くて、すべての價値判斷は、此の先天的規範意識によつて成立すると云ひ得るであらう。爰に於て「哲學は規範意識の學である」(9) と云ひ得よう。規範意識の承認は哲學の豫想なのである。

規範に從て始めて現實的なるものの價値が定められるのである。他の諸科學の判斷に於て認識され記述され説明される客體の全體に對する普遍妥當的な價値判斷は、規範によつて始めて可能なのである。さればこそ、「哲學は絶對的價値判斷に就ての學である」(10)と云ひ得るのである。價値判斷の普遍妥當性の要求は、價値判斷が或る普遍妥當的價値への關係を言ひ現はし又は豫想してゐることによつてのみ可能であると云はねばならないのである。

（1）Windelband, Was ist Philosophie? S. 34.

（2）Windelband, Einleitung in die Philosophie. 1914. S. 244.

（3）「あらゆる判斷の賓辭は、表象された世界に類概念として、性質、活動、狀態、關係等として關係された積極的な表象である。即ち一の物が物體であり、大きい、固い、甘い等であり、動き、ぶつかり、靜止し、他のものを生出する等である。之に反して、あらゆる價値判斷の賓辭は、或る物が快いとか不快であるとか、或る概念が眞であるとか僞であるとか、或る行爲が善いとか惡いとか、或る風景が美しいとか醜いとか等である。」(Windelband, Was ist Philosophie? S. 30.)

（4）Windelband, Was ist Philosophie? S. 31.

（5）Windelband, Was ist Philosophie? S. 32.

（6）Windelband, Was ist Philosophie? S. 34.

（7）Windelband, Was ist Philosophie? S. 37.

（8）Windelband, Was ist Philosophie? S. 42.

（9）Windelband, Was ist Philosophie? S. 46.

（10）Windelband, Was ist Philosophie? S. 46.

五

哲學的方法としてヴインデルバントは何を語るか。それは批判的方法であつた。それはカントの唱へしところ、然かもヴインデルバントの冒棄を借りれば「其の批判的方法の概念は、自明的明瞭性を以て一切の誤解を防ぎ又歴史的事實として明白に斷言せられ得るほど一義的且つ嚴密に規定せられたる體裁を具へてゐなかつた」(1)ところのものである。ヴインデルバントは之を明確にすべく努力した。そして哲學をして其の方法から云へば批判的學たらしむることに努めたのであつた。

特殊科學は其の證明に演繹法を用ゐるにしても又は歸納法を用ゐるにしても、其の認識活動の根柢には公理(Axiome)の承認が存してゐることは、敢て云ふ迄もないであらう。「公理の承認とは、公理によつてのみ事實に關し或は事實からして何事かが證明され得る、換言すれば何事かが眞として確證され得るといふことを意味する。」即ち特殊科學が最初から公理を自明のものとして受け容れてゐるのである。ヴインデルバントは云ふ、「理論的哲學たる論理學の課題は、斯の如き公理の體系を表示し認識活動に對する公理の關係を發展することに外ならない。」このことは更に倫理學美學の方面にも擴大し、斯くて「哲學の問題は公理の妥當である」といふことが出來るのである。(2)

云ふ迄もなく公理は證明され得ないものである。それは演繹的にも歸納的にも證明せられ得ないものである。何となれば「公理それ自身があらゆる演繹の根柢を爲すものであり、若し假りに證明せられ得るとすればこの證明に對して、更に一層普遍的なるもの、直接的なるもの、從て更に一層高き公理が再び要求されねばならぬからであり、如何なる歸納法と雖もそれが適用せらるる領域に於て、既に公理の妥當そのものを前提するが故である。この故に哲學が諸學に於て一般に用ゐられてゐる演繹的方法及び歸納的方法の何れも使用し得ないことは、明白である。」(3) 妥に於てそれは他の方法によつて其の問題を解決せねばならないのである。それには二樣の仕方が可能であるとヴインデルバントは云ふ。即ち一は「事實的妥當性を示し人間の表象、意欲及び感情の現實的過程に於て斯の如き公理が事實上妥當するものとして承認されること、換言すればそれが精神生活の經驗的現實に於て妥當し且つ承認されてゐる原理なることを立證せんとするものである。」「この場合公理は、人間の表象、感情及び意志決定の發達に於て自ら形成され、又茲に於て妥當力を獲得したる事實的解釋樣式である。」之が哲學の發生的解釋である。之に對して他の方法たる批判的解釋は、「公理に目的論的必然性が存し、若し或る目的にして實現せらるべきであるならば、其の妥當は絶

對的に承認せられねばならぬといふことを示すものである。」「玆に於ては公理は其の事實的妥當が如何程の範圍に及ぶものかに就ては全く關係なく、思惟は眞なる目的を、意欲は善なる目的を、感情は美なる目的を達成せんとするものであるとの前提の下に妥當すべき規範である。」(4)

此の前者はヴィンデルバントの採らざるところであつた。それは公理を經驗的發生的にのみ論ずる時に於て、獲得せられ得べき最高のものは、結局公理が事實妥當することを實證し又之を心的生活の法則から説明し得るのみに過ぎぬからである。(5)又、「發生的説明は事實的實證と全く同樣に、一切のものに等しく適合する、從て發生的説明に對しては絶對的標準なるものは存在しない、斯の如きあらゆる主觀的確信はそれに對して等しき權利を持たねばならない、何となればかかる確信は等しく自然必然的に妥當するからである、發生的説明に對すれば斯の如きあらゆる命題と之に基く價値判斷とは、一方個人の立場に對し又他方歴史的制約を有する社會の精神的全生活に對して、たゞ相對的價値を有するに過ぎない」(6)からである。即ち玆に於ては規範的なるもの、普遍妥當的なるものを否定せねばならなくなつて來るのである。そして此の方法の下に於て、縱令公理の事實的妥當は多數者に於て求めらるとして規範的なるものを量的關係から規定せんと努力しても、其の主唱者に對して「吾々は、多數者は未だ曾て迷つたことは無かつたかと云ふ問を發すれば足りるであらう。」(7)又規範的なるものは歴史的過程によつて規定される、公理の事實的妥當は歴史の進歩によつて實證され得ると説く者は、「何が進歩と稱せらるべきであるかと云ふことを此の意味に於て規定する原理を既に持つてゐなければならないのである。」「人は公理を確立し承認したる後に、それが人類の歴史的發展に於て事實的承認を獲得し又當に此の點に歴史の進歩が存する所以を初めて示し得るのである。」(8)

發生的方法は既述の特殊科學に於ける經驗的研究と同じく、規範的意識を既に前提してゐるものと云はねばならない。「之に反して批判的方法は唯一の全體的前提を必要とするのみである。即ち規範意識なるもの存し其の原則は苟も何ものかが普遍妥當性を有すべき限り承認せられねばならぬと云ふことを是れである。」批判的方法は次の如き確信の上に立つ。それは「普遍的價値なるもの存し、それを達成せんとするならば、表象、意欲及び感情の經驗的過程は、そのもの無くんば目的の實現が考へ得られざることろの規範に從て遵動せねばならないとの確信」(9)である。批判的方法に於ては、事實的承認が如何なる範圍にまで及ぶかには關係ないのである。從て批判的方法は、普遍妥當的目的及び經驗的意識に於て認識されるといふ其の能力に對する信仰を、前提とするものであると云はねばならない。それ故に哲學的研究なるものは、普遍妥當なる規範が個人的活動の上に存することと及びかかる規範が發見せられ得ることを確信する人々の間に於てのみ可能である」(10)とヴィンデルバントは云ふのである。

斯の如く批判的方法は、普遍的に是認せらるべき表象、意志決定並びに感情が存在せねばならぬとの前提から出發する。然かも此の目的の實現に「缺くべからざる制約として表示せられ得べき精神生活のあらゆる運動形式」を「目的論的考察に從て探求」せねばならないのである。彼に於ては公理或は規範は先天的に妥當すべきものであり、從てかかる公理或は規範そのものの證明は經驗的性質を帶びてはならないのである。それ故に上述の探求に際して「批判的方法は現實的精神生活に與へられた特殊的個別的規定を證明根據として用ゐてはならないのである。」(11)「一切の公理、一切の規範は、如何なる特殊的内容及び如何なる歴史的制約からも全く獨立して、普遍妥當性なる目的を實現すべき手段となるのである。」(12)

以上の瞥見によつて其の一半を知るが如く、ヴィンデルバントの哲學はカント哲學を繼承するものである。然かも規範を目的論的關聯の必然性に發展せしむることを説くところに既に見得るが如く、彼の批判哲學は目的論的なるものであると云はねばならない。玆に彼の哲學の獨自性は存するであらう。然かも、尙、規範意識を目的論的體系として演繹したのは、フィヒテであつた。玆にヴィンデルバントに對するフィヒテの影響も見られるであらうし、又、妥當の概念に就ては其の師ロッツェに負ふところ甚だ多きものがあらう。(之に就ては後述するであらう。)「而してロッツェの刺戟により、固定せるもの及び恆常なるものに推し進まんとする傾向が生じた」と共に、更に同じく彼の師たりしクノオ・フィッシャアによる感化は後述する歴史的發展の原理となつて、此の哲學者にとり入れられたことは、リッカアトの云ふが如くである。(13)又、その故にこそ、近くリッカアトは彼を「約七十

年前、希臘哲學史家エドアルト・ツエラアに始まるハイデルベルクの哲學的傳統」の一人とするのである。(14)此等多くの影響は玆に渾然として彼の價値哲學を形作つたのである。事實に對する普遍的規範、事實に對する價値の定立はカントに萠芽するところである。然し之を上述の判斷と價値判斷との區別からして、哲學の中心に置いたことはヴィンデルバントに於て高く評價せらるべき業績と云はねばならない。そして規範を文化の領域にまで擴大して、カントの哲學を文化哲學と解したことも亦記憶せられねばならぬところに屬しよう。乍併筆者は玆に彼に對する批判の辭を連ねることは、敢て省略するであらう。何となれば、そのことは玆に課題とはなつてゐないのであるから。

かかる哲學觀の下に於て本稿第一節に掲げた歴史學は如何なる認識論的根據を與へられるのであるか。稍〻重複するところのあることは否めないが、以下に於て筆者はヴィンデルバントの歴史認識論を再度明かにして、以て本稿の課題の一半を終へたいと思ふ。

(1) Windelband, Kritische oder genetische Methode? in Präludien. 4. Aufl. Bd. 2. S. 99
(2) Windelband, Kritische Methode. S. 108.
(3) Windelband, Kritische Methode. S. 108.
(4) Windelband, Kritische Methode. S. 109.
(5) Windelband, Kritische Methode. S. 114.
(6) Windelband, Kritische Methode. S. 115-6.
(7) Windelband, Kritische Methode. S. 118.
(8) Windelband, Kritische Methode. S. 120.
(9) Windelband, Kritische Methode. S. 122.
(10) Windelband, Kritische. Methode. S. 123.
(11) Windelband, Kritische Methode. S. 125.
(11) Windelband, Kritische Methode. S. 126.
(12) Heinrich Rickert, Wilhelm Windelband. 1915. S. 2.
(13) Heinrich Rickert, Die Heidelberger Tradition in der deutschen Philosophie. 1931. S. 6.

リッカアトに據れば「ハイデルベルクの傳統の本質は、哲學的勞作に際して、其の思索を學的に强固ならしむる爲めに、過去との接觸を絶つことなく、哲學史を援用して以て體系づけるものである。」(S. 8) それは端的に云へば、論理的基礎付けと歴史的構成との結合である。即ち「ハイデルベルグの傳統は、學的哲學の歴史家と共に、體系家を必要とするのである。」(S. 21.) 從てそれは、「特殊的個體即ち生ける哲學者の人格を重視して、哲學の課題は、哲學者の個人的世界觀を個別的形態に於て表現することにありとする」浪漫哲學と、反對の立場に立つ。其の故は、「學は一切の個性に對して同樣に妥當することを欲するからである。學は個人の勢力を知らない。何となれば、學は普遍妥當的非個人的眞理以外には何物も求めないからである」(S. 10.) とリッカアトは云ふ。然かも「哲學者は彼の一回的歴史的位置の特殊性に引きこまれ、又それを顧慮せねばならない」(S. 17) のであるが、尙それを超えて普遍的なるものを認識せねばならないと云ふのである。

六

既述の如くカントが承認し批判的に權利を認めた學は、經驗の法則の科學であり、自然科學そして特に數學的自然科學であり、ニュウトンの理說であつた。(1)素よりこのことは、カントが學の範圍から歴史的學科を排除したことを非難するものではない。何となれば、ヴィンデルバントは云ふ、

「カントの時代に至るまで實際に於て主として歴史記述の藝術と共の點に於ける偉大な藝術家とがあつたのみであり、歴史は他ならぬ文學に屬して、未だ學ではなかつたからである。歴史はカント後に始めて學になつたのである。自然科學の目立つてゐる殊に外部に向つて印象の多い開展と並んで、それよりも一段靜かではあるが不斷にして目的の確實な事象として歴史を學たるものの段階に高めることが現はれたといふことは、十九世紀精神生活に於ける極めて獨自な現象に屬してゐる。」(2)

斯くて批判哲學はカントの知識に就ての概念の擴張を望むに至つた。「歴史は自然研究と並んで理論的學說に於ける共の權利を要求してゐる。その本質と認識價値とも亦共の現實の勞作に從て理解せられ評價せられんことを欲してゐる」(3)のである。では此のカントの認識批判の擴張と補充とは如何にして爲されるのであるか。如何に歴史科學が自然科學と同じく批判の問題となるのであるか。

此の課題の爲めに第一に重要な要件は、此の兩經驗科學の間に存する根本的差別を考察することである。之に對してヴィンデルバントは云ふ、「とは云へ斯樣な差別は、凡ゆる概念的差別と同じく一の共通根據から發展する。而して斯の如き根據は、凡ゆる經驗科學の共通課題に於てのみ求められるものである」(4)と。筆者は之を以下に於て求めるのである。

表象と實在との一致に眞理が存するとする見解を模寫說と稱することは周知の事實であらう。「此の見解に從へば認識作用は世界をそれがあるがまゝに表象することを問題とする。」(5)乍併かかる實在の模寫なるものが、人間の如何なる表象によつても、從て又此の表象の上に建設せられたる如何なる科學に依つても遂に達成せられ得ないことは明かである。第一に「吾々は吾々の意識に於て、外界の事物に對應する記號と考へられる感覺內容が、該事物の模寫物たるの要求を果して有するか否かを決して知り得ないと云ふことから生ずるところのあらゆる疑懼は暫らく措くとするも、謂ゆる對象の剩すところ無き完全なる觀察が決して吾々の知覺に與へられてゐないといふことは、吾々の發見を一瞥するだけでも既に明かである。實在の有する無限に多くのメルクマアルの中からして、とにかく吾々の知覺意識に入り來るものは、如何なる場合にも僅かに共の一部分に過ぎないのである。」(6)從て吾々の認識的思惟を成立せしめるあらゆる回想的、綜括的表象構成が、實在の全存在からの選擇作用を表はすものであることは明かであらう。ある事物に對して吾々が有する全體表象は、該事物に就て構成した一切の個別的知覺から簡拔した比較的僅少な部分にのみ限られてゐることは、敢て例證するまでもないことである。「それは實在からの一の截面、一の選擇物を意味する。」而してこの選擇は、それが充分に意識せる意圖を以て行はれた場合に於ても、又は無意圖的に爲された場合にあつても、等しくその標準は吾々にとつて、又は該事物が他者に對する關係にとつて、「何等か重要なりしところのもの、若しくは重要であり得たりしところのものである。」(7)それは約言すれば本質的なるものを選擇するのである。

「斯の如く假に吾々の恣意的ならざる表象構成が本質的なるものの選擇過程に依つて規定されてゐるならば、此のことは吾々が意圖的思惟によつて產出する全ての表象に對しては、一層高き程度に於て當嵌るのである。吾々はかかる表象を概念と名付ける。されば如何なる概念も意識に於ける

選擇的創造に由來しないものは無いのである。」概念は、知覺からの分析的選擇と綜合的結合とによつて成立するのである。故にヴィンデルバントは云ふ、「吾々が概念に於て表象する內容は實在の單なる模寫、即ち事物の模寫の如きものに非ずして、選擇し綜括する思惟作用の所產である。吾々が概念によつて考ふる認識對象は、實在の模寫物として與へられてゐるものでは無く、思惟そのものによつて產出せられたものである。」(8) 斯の如くヴィンデルバントは、素朴的實在論の有する對象の定義を、カントの純粹理性批判に行はれた如く改めたのであつた。

而して爰に於て、以上の如き根本關係からして、あらゆる認識批判の基本的課題が生ずるのである。それは學的概念構成に於てメルクマアルの選擇及び結合作用を生ぜしむる原理を規定することに外ならない。「學に於て概念が產出せられる仕方も、結局は常に其の特殊的認識目標によつて規定されてゐるのである。如何なる學も或る意味に於て、その學の有する概念そのものによつて初めて自己の對象を產出するのである。」(9)

ヴィンデルバントに從へば、「學の概念の客觀的妥當が據つて立つべき學的權利（學が各自の概念を以て行ふ選擇並びに綜合的創造の權利）は、最高要請として、又云はんと欲するならば、究極的前提若しくは成見（Vorurteile）として判斷構成の全過程を規整する普遍妥當的原理に在る。」(10) 之が曩に述べた凡ゆる經驗科學の共通課題なのである。

從來の學的知識、即ち自然科學的知識に對して、此の根本關係を云ひ得ることは云ふ迄もない。自然科學に於ける認識目的は「純粹論理的の價値に、即ち普遍性に存する。普遍性の論理的價値は事物又は生成の類概念として、即ち類型又は法則として現はれるのである」。(11) 自然科學に於ては個別的事實を把え其の關聯を理解して以て多樣な所與から、「確乎たる事物概念を構成し合則的因果系列を認識せしめ得るところのもの」を簡拔する。「斯くして事物と共の交互作用とに關して恣意的でなく構成された表象は、類概念を構成すべき論理的形式によつて加工せられ、實體及び自然法則の認識となるのである。」(12) そして之が、一切の自然研究の最後の目標なのである。然るにこのことを直ちに以て歴史研究にも當嵌めることは出來ないのである。此者にあつても前者と同じく多樣なる所與から選擇を行ひ再構成を爲す。然し歴史的知識の範圍は生起一般のそれよりも甚しく狹いのである。何となれば歴史研究の主要構成部分を爲すものが人間に關する事柄であることは明かであるが、人間に生起する事件が必ずしもすべて歴史的ではないからである。歴史的生起は常に人間に關係してゐる。人間外のものは、たゞそれが人間の歴史と重要な關係を有する時にのみ、例外的に歴史的となり得るのである。然し他方に於て、人間に關して生起するものはすべて歴史的であるのではない。人間が日々經驗し、行爲する無數のことは、すべて歴史的生起ではないのである。爰に於て生起が歴史的たる爲めには如何なる性質を有さねばならないかの問題が生ずるのである。

一の生起をして歴史的たらしめるものは何であるか。之に對してヴィンデルバントは答へる。「それはその特殊性に於て、人間一般に對し、人類に對して何等か意義あるものでなければならない。個別者は人間の共同生活に於ける包括的全體に對して意義を有するときは、それは歴史的に意義あるものとなるのである。此の人間の共同生活に對する價値關係が、個別的生起に歴史的なる性質

を賦與する決定的なるものである。かくて斯かる共同生活に於て、其の特性によつて特別な或るものを意味する個別者が眞に歴史的なのである。」(13) 之を要約すれば曩の問に對しては、それは人間の價値生活に關係せしめられることを要すると答へるのである。即ち「歴史科學は概念的に形成された人類の普遍妥當的全體記憶を表明すべきものであるから、其の最高前提並びに選擇原理としては普遍的價値の體系を必要とする。」(14) 即ち此の種の學に於ける選擇及び綜合の原理は一の價値關係なのである。そして、此の學は多樣の生成の中から價値に關係することによつて關心をそそり得る如きものを取り出し、以て個々の要素を價値關係的全體構造として完成することによつて、其處に自らの對象を作るのである。「歴史科學は或る價値的認識を意味する。この歴史研究に於ける價値的のものとは、對象そのものが或る價値への關係を通して再び學の中へ現はれて來るといふことに存する。」(15)

斯くてヴィンデルバントに於て、「歴史研究が自然科學から區別されて普遍妥當的認識なる學的特性を獲得するのは、吾々が歴史をば理性價値の進行的實現、即ち精神生活の普遍妥當的價値內容が人間の混亂せる興味と欲情とから脫して意識され又實現されるを文化の過程と看做すことによつてのみ可能である。學の一般的狀態によつて現代の哲學に課せられた歴史學の理解は、此の意味に於て文化價値の批判的理說を要求するのである。」(16) 歴史的知識は斯の如くして學にまで高められた。そして歴史科學は以上の如く普遍妥當的なる學的知識として、又其の獨自性を具備せるものとして、以て其の存在を明かにされ、斯くて自然科學と相並んで批判の對象となつたのである。

自然科學と歴史學一般との對立は、以上の如く哲學的根據付けによつて可能となつたのである。實にカントに於て、一切の經驗的認識を可能ならしめるものは、其の根柢に横はる論理的な先驗的認識であつた。ヴィンデルバントは同じく此のカントの立場に立ち歸へりながら、更に學的知識の領域をカントの說くところよりも擴張し、其の先驗的根本原理を自然界のみならず、歴史にまで適用したのであつた。

(1) Windelband, Fichtes Geschichtsphilosophie, in Internationale Wochenschrift für Wissenschaft Kunst und Technik. 2. Jahrg., Nr. 16. Beigabe zur Münchener Allgemeinen Zeitung. 18. April 1908. S. 483.

(2) Windelband, Nach hundert Jahren, in Präludien. 4. Aufl. Bd. I. S. 154.

カントに於ては、學は學である限りすべて法則的普遍の基礎に於て成立せねばならないのである。歴史的知識は普遍妥當性を欠くが故に學的知識とはなり得なかつた。それは、カントにあつては合理的な認識となり得ざる殘餘であつた。非合理的なものであつたのである。

此の非合理的なるものは如何にして合理化されるか。そしてそれは如何にして學的なるものにまで高められ得るか。元來、非合理的なるものの合理化は二つの方途のあることが考へられる。非合理的なるもの――それは同時に特殊的なものである――に普遍性を與へることは其の一途である。素よりそれは完全な普遍性ではなく不完全なそれである。即ちこの嚴密なる法則の下に包攝し得ざる特殊的なるものを不完全な法則の下に包攝し、以て能ふ限り因果法に近寄らしむるのが其の一である。乍併特殊と普遍とは常に相伴ふものである。特殊は普遍に對してのみ特殊であり、如何なる特殊も既に普遍を含み普遍に關はつてゐると云はねばならない。從て不完全なる普遍性なるものは、漸がて完全な普遍性が歸入され、歴史に於ける偶然の事件は遂に必然の法則によつて理解されるものとなるで

あらう。即ちかかる合理化の過程に於ては、特殊は無限に法則的普遍に攝取されて行くのである。歴史的偶然の事件を出來るだけ因果法に包攝せしめることによつて、歴史を理解するのである。

乍併、此の他に特殊性を失はずして合理化される特殊的なものがある。云ふ迄もなく合理化するとは常に普遍による特殊の包攝を意味するが故に、此の第二の方途に於ても何等かの普遍が要求される。それは一言にして云へば法則的普遍に非ざる具體的普遍である。分析的普遍に非ざる綜合的普遍である。特殊的なものは亦偶然的なものであると云へるが、此の偶然性は、特殊が直ちに全體に於て見られ、全體が直ちに特殊に於て見られる具體的普遍に於て始めて止揚されるといはねばならない。かかる全體に於て特殊はその全體に對して占むる特殊な意味を明かにされる。爰に於て特殊は特殊な意味に於て合理化され、偶然なるものはその儘必然化されるのである。この偶然なるものの法則性はカントの云ふ合目的性である。（高坂正顯、カントの歴史哲學。思想、第七十二號「昭和二年十月」七二——四頁。）

而してヴィンデルバントの云ふ歴史研究の中には、方法論上の構成要素として、目的論的なモメントを含んでゐるものである。

（3）Windelband, Hundert Jahren. S. 155.
（4）Windelband, Gegenwärtige Lage. S. 15.
（5）Windelband, Die Prinzipien der Logik. 1913. S. 8.
（6）Windelband, Gegenwärtige Lage. S. 15.
（7）Windelband, Gegenwärtige Lage. S. 16.
（8）Windelband, Gegenwärtige Lage. S. 17.
（9）Windelband, Gegenwärtige Lage. S. 17. und 18.
（10）Windelband, Gegenwärtige Lage. S. 18.
（11）Windelband, Einleitung. S. 238.
（12）Windelband, Gegenwärtige Lage. S. 19.
（13）Windelband, Geschichtsphilosophie. (hersg. von Wolfgang Windelband und Bruno Bauch.) in Kantstudien. Ergänzungshefte im Auftrag der Kantgesellschaft. Nr. 38. 1916. S. 39.
（14）Windelband, Gegenwärtige Lage. S. 19. und 20.
（15）Windelband, Einleitung. S. 240.
（16）Windelband, Gegenwärtige Lage. S. 20-1.

ヴィンデルバントは、其の論文「百年の後」、一五五—七頁に於ても、自然研究と歴史研究との學的基礎付けを述べてゐる。

七

甚だ不完備なものではあるけれど、ヴィンデルバントに於ける歴史學方法論の問題は、以上を以て筆を止めることにしよう。法則定立的といふ歴史學的概念構成は、たゞ一八九四年の講演のみによつて認めらるべきものではないことを、彼の處女論文から又彼の哲學觀の瞥見からして、重複することを敢てしながら述べたのが、以上の諸節に亘る本稿前半の主題なのである。云ふ迄もなく彼の學の分類は、其の價値哲學あつて始めて爲し得るところである。從て此の基礎を認容せざる人々にとつては、上述の如き學の分類は問題とならざるを得ない。例へばエリッヒ・ベッヒャアは、其の批判的實在論的立場からして、ヴィンデルバントの學の分類及び歴史學の論理的構造に就て批判を加へ、歴史學は特に個性記述的のみでないことを說き、歴史研究の本質的選擇原理は das Prinzip der

Grösse であり、之のみが唯一の客觀的意義を有するものであることを述べてゐる。(1) 乍併此等を檢討することは、素、本稿の意圖するところではないが爲め、敢て其處には向はないであらう。

上來、筆者が見來つたところのものは、歴史的知識の認識論である。然かも再三述べたるが如く、批判哲學は哲學前的知識の批判的分析により一切の實質的知識に進み入るべきことを敎へたにも拘らず、歴史に關しては此の問題を認めず、或は之を認めても明白に論究しなかつた。カント自身さうであつた。(2) 此の認識論的問題が歴史科學にまで擴められたのは、是亦前述せる如く十九世紀に於ける歴史學の進歩的科學化に應ずるものでもある。そしてヴィンデルバントはディルタイと相並んで之に努力したと見られるのである。

然かも此の歴史學の認識論は、ヴィンデルバントに於ては、歴史哲學の一半を占むるもの、其の最初の段階たるものであつた。人あつて歴史學認識論を歴史哲學の全體をなすべきものであると云ふならば、其の人は哲學一般が即ち認識論であると見た時代に呼吸することを表明するものに外ならない(3) としたヴィンデルバントは、然らば、何を以て歴史哲學の課題であるとするのであるか。それは一言にして云へば、歴史的經過を目的見地から價値判斷するもの、(4) 然かも此の目的論的契機は既に經驗的歴史研究に於て方法的成分として含まれてゐるのであるが故に、歴史哲學にして獨自的たらんとするが爲めには、之と相異れる二方向に、即ち形式的及び實質的に、換言すれば一は方法論的認識論的に、他は實質的形而上學的に探求すること是れである。(5)

云ふ迄もなく學としての歴史が、發展、進歩、退歩、停滯等を論ずる場合、それは價値判斷の規範として前提する一定の價値の下に於て價値判斷を行ふものである。——但しそれは歴史を道德化するの謂ひではない。「若し歴史學がかかる價値判斷を行はないならば、それは單に年代記的記述に過ぎないものである」(6) とヴィンデルバントは云ふ。かかる價値判斷が殆ど機械的に、從て理解されずに又無意識に行はれてゐることに對して、此の價値判斷方法を理解し、以て歴史學が素朴的に行つてゐる方法を反省することは必要である。(7) 然かも尙、嘗てヘエゲルがハイデルベルクの講壇から要求した「眞理への勇氣」(7) を貫徹せんとする時には、かかる歴史認識論に止まることは許されないところであると云はねばならない。即ち歴史認識論の深い考究から、當然歴史哲學の實質的課題へと進まねばやまないであらう。寔に「經驗的歴史研究に於て、發展、進歩等が價値判斷される目的は多樣である。其等の目的は各々たゞ制限された價値を表はし、從て制限された妥當性を有するのみ。爰に於てか普遍史的價値判斷の原理として、一切の歴史的生起の究極的意味及び最高目的に關する問題が、自ら起つて來る」(8) と云はねばならない。そして之がヴィンデルバントの歴史哲學に於ける第二の道なのである。斯くてこそ哲學者は、其の要求された「眞理への勇氣」へ邁往することが可能であると云はねばならないであらう。

ハイデルベルクの傳統の繼承者の一人として、ヴィンデルバントは勿論此の勇氣を有してゐた。其の思索するところは「歴史學の哲學即ち文化研究の認識論」に止まらず、更に「文化發展の實質的問題へ向ふことを權利とし又義務」(9) としたのであつた。その問題は之を一言にして云へば人類史論である。上來筆者はヴィンデルバントに從つて、遂に彼の歴史哲學の最後にして最高なる問題のシュ

ウエレにまで到達した。續いて、本稿後半の課題として之に就き述べるのであるけれど、前述の如く此の問題は、歴史認識論の深き考究からして自から承認されるものであるが故に、稍〻重複するところあるに拘らず、歴史認識論に立ち戻つて、其の記述を進めることを許されたいのである。

既述の如く、歴史的生起は常に人間に關係してゐる。「それは人間に於ける、又人間に就ての生起である。（Es ist des Geschehen im und am Menschen.）」(10) 從て歴史を有するのは人間のみであると云へよう。然かも亦前に述べたるが如く、人間に關して起るものが總べて歴史的であるのではなく、生起が歴史的たるには、其の特殊性に於て人間一般即ち人類に對して意義を有するものであらねばならず、而してかかる性質は人間の共同生活に對する價値關係によつて賦與せられるものである。即ち「客觀的意味に於ける現實なる歴史として歴史的生起は、生起の全體を意味せず、又人間に關する生起の全體さへも意味しないで、たゞ其の選擇された一部分、即ち客觀的生起として爾餘の生起中に含まれた或るものを意味し、それは自ら一の特異な、完結せる實在に上るのではなく、記憶の關心によつて初めて歴史的知識の中に引き上げられ、一の新しき統一に於て結合される或るものである。」(11) 然かも「吾々が個々の事實の選擇に就て云ふことは、又個々の事實が、意義ある生起の歴史的形態及び全體形像に結合されることに就ても適用されるのである。すべての歴史的知識は、事件の因果的及び目的論的系列を吾々に與へる。すべて此等個々の事實は、全體生起の成分であつて、それ自身の爲めに記憶に引き上げられ、相互に結合されて、以てそれから意義あり價値ある全體的構成物が形成されるのである。」(12)

歴史も亦其の成果に於て、それ自身特有の種類の普遍者を有する。勿論かくは云ふものの、このことは歴史が概念又は法則の形式に於て普遍者を有するといふのではない。「それは全體形像及び全體形態の形式に於て、普遍者を有するのである。それは歴史が自然科學の概念及び法則に於て、吾々に與へられる抽象的普遍性の代りに與へるところの具體的普遍性が入り込む共同的存在か又は時間的發達かの、意義ある全體形象に個別者を接合することを意味するのである。然し歴史の個性的形態は任意に何れの個性或は個別者にも適用されるのではなく、茲には價値關係の選擇原理が支配するのである。」(13) この原理は、周知の如く、決して價値判斷を意味するものではないのである。歴史的對象は、それが選擇される價値原理が普遍妥當的性質のものであつたといふことによつてのみ、普遍的に妥當するのである。「斯くて吾々は選擇された生起に、歴史的對象性の普遍妥當的性質を賦與するところの選擇が行はれる價値見地として、發達しつゝある人類の利益或は關心といふことに、到達する。」即ち特殊者は、意義ある全體の發達の一項として其の全體の中に編入されることによつて、歴史的に價値あるものとなるのである。「斯くて歴史の個性化的思惟の價値關係は、單にそれ自身に於ての個人ではなく、それが高等なる統一體に對して、從て結局人類全體に對して有する意義に於て、個人を取扱ふものである。而して此の意味に於てのみ、歴史は人類の歴史なのである。」(14)

此のことは又次の道をとつても云ひ得るところである。それは眞理問題から出發して前述の結論に達する道程である。過去の事物の認識に關しては、言葉や文字や記念物等により確保される記憶

に訴へねばならない。「然し對象として歴史的眞理は、記憶及び再構成する想像が、缺け、或は全く虚偽である時にも、尚そのまゝ存する。同様に生起は忘れられることによつて非生起とされるものでないことも眞實である。」「從て歴史的眞理とは吾々の知識から獨立に妥當するものである」(15)といはねばならない。歴史的生起は對象としては記憶によつて規定されるのであるけれど、その記憶とは個人の偶然的な又は恣意的なそれを意味するのではなく、人類の全體の記憶を意味するのである。それは人類の全體的作業に俟つものといはねばならない。

斯くて、人類の全體といふことは、茲に於て檢討せらるべきものとなつたのである。そして其處にはヴィンデルバントの批判的歴史哲學の實質的問題が展開されるのである。歴史が合目的性に於て理解されると云ふことは、更により詳らかに其處に看取さるべきである。

（1）Becher, a. a. O. S. 205 u. 209.
（2）Fritz Medicus, Kants Philosophie der Geschichte. (Einladungsschrift.) 1901, S. 5.
（3）Vgl. Windelband, Geschichtsphilosophie. S. 24.
（4）Windelband, Geschichtsphilosophie. S. 20.
（5）Windelband, Geschichtsphilosophi. S. 22-3. 歴史的過程の全體發展に統一的説明を與ふる普遍史を歴史哲學であるとも説くもの（例へばアウグスティン、ボシュエ、ヘルダア等）、歴史的過程の恒常的合法則性に之を求めるもの（例へばヴィコ）は、孰れも原理上、歴史學の研究するところであり、從て斯くては歴史哲學を歴史學と峻別するを得ないとして、ヴィンデルバントは此等を排斥するのである。(S. 14-19.)
（6）Windelband, Geschichtsphilosophie. S. 22.
（7）Mut der Wahrheit は同時に Mut zur Wissenschaft であり、ハイデルベルクの傳統のすべての繼承者の有するところである」とリッカアトは云ふ。(Heidelberger Tradition. S. 10.)
（8）Windelband, Geschichtsphilosophie. S. 25.
（9）Windelband, Einleitung. S. 333.
（10）Windelband, Geschichtsphilosophie. S. 37.
ヴィンデルバントは云ふ「歴史(Geschichte)なる語は二重の意味を有する。客觀的には生起(Geschehen)を意味し、主觀的には生起の知識を意味する。更に生起は又二重の意味を持つ、生成と消滅と是れである。生起とは一の時間的實在である。無時間的永久なるものは、全く生起を有しない」と。(S. 34.)
（11）Windelband, Geschichtsphilosophie. S. 41 2.
（12）Windelband, Geschichtsphilosophie. S. 42.
（13）Windelband, Geschichtsphilosophie. S 48.
（14）Windelband, Geschichtsphilosophie. S. 49.
（15）Windelband, Geschichtsphilosophis. S. 50.

八

人類は生物學的、心理學的、社會學的概念として解される。例へば人類は自然的生物として一の有機的統一體を形作つてゐるとするのは、人類に關する生物學的概念である。然し此等の意味に於ては、人類は類概念として與へられるのであつて、方法的には他の生物と異なれる取扱を受けるを要しない。茲に人間の、又其の歴史的現象形態の、法則學的取扱の可能性が成立する。此の意味の

人類は、動物學上の一の種としての人類の、自然科學的生物學的概念を意味するものである。乍併ヴィンデルバントに於ける歴史の問題とする人類は斯の如きものではない。之と異れるものを意味する人類である。それは生起の選擇及び綜合に於ける歴史的なるものの價値規定の中心を意味する人類なのである。彼は云ふ、「空間及び時間に於て、地球の全面に亙り又幾千年を通じて漲れる人類生活は、單に動物學的類概念に包攝されるといふ論理的意味に於て、統一的全體を意味するのみならず、又一の眞實なる實在を意味すべきものであることが言明されねばならない」(1)と。乍併この後者の一の眞實なる實在といふ意味に於ける人類は、「概念的實在として與へられてゐるものではなく、それはカントの言ふ意味の理念として考へ出され又は作り上げらるべきものなのである。」(2)

言ふ迄もなく理念の王國はプラトンによつて見出されたものである。然かもヴィンデルバントは、之を其の歴史哲學に取り入れるに際して、それはカントの言ふ意味のものたることを斷り書きする。爰に於て筆者は、彼の眞意を窺はねばならない。プラトンに於て、理念は、吾々の意識内に表示される概念でなく、それは個人的意識を離れて客觀的に實在する超越的に存在するものであつた。「古代の人々は、表象を意識の或る創造的なエネルギイから生ずるものと考へることが出來ないで、却つて常にすべての認識作用をば單に受け取られたもの、前面に見出されたものの模寫作用として解するのが常であつた。」(3)即ち知識は存在を意識のうちに模寫することであつた。「若し知識が、知覺とその内容とのみに限られてゐるならば、かかる知識は常にたゞ相對的眞理に到達し得るのみであらう。」(4)何となれば知覺の對象は、變轉交代してやまない雜多な物質的世界であり、然かもかかる世界の事物が知覺によつて把捉されるのは、知覺作用の行はれる間に於てのみ可能であり、從て知覺には「一面の相對的瞬間的な眞理及び認識力」が存することしか認容出來ないからである。「この故に知覺に對しては、本來の完全なる學的知識性は確かに否定されねばならない。」(5)然し認識活動は知覺のみがその全部なのではないのである。即ち「思惟すること」は「知覺すること」と相異る——種類に於ても價値に於ても——認識活動である。茲にプラトンは眞の知識を求めた。動搖する知覺に對して確實なる知識を獲得せんとし、そして其の知識を概念に於て見出したのである。それは概念的認識である。然かも上記の如く希臘の人々にとつて知識は表象と其の對象とが一致することであつたから、「眞の知識が概念に存するとすれば、此の概念の内容のうちに眞の存在即ち絶對的の實在が認識されてゐなければならない筈である。」(6)それがプラトンの云ふ理念であつた。それは「知覺に對して理想として現はれ、此等の知覺の中に見出されるのではなくしてたゞ此等を緣として見出されるものである。」(7)「機能として知的活動としては概念であり、特に類概念であるもの、然かも概念内容のうちに認識され模寫されてゐるところのもの、即ち對象としては、眞の實在の形態であり、内容的に規定された形に於ての存在そのものであるものである。」(8)之が理性的思惟の對象なのであり、概念的知識の對象なのであつた。

再言すれば「すでに諸概念の中に、知覺を緣としてではあるが然し決して知覺の根源として發展しはじないところの、それ自らは何時までも知覺とは本質的に異つてゐる或る知識が存するからには、此等の諸概念の對象である諸理念も亦、知覺の諸對象と並んで、此等とは別に、一の獨自にして且

つより高き實在をなしてゐなくてはならない。然るに知覺の對象は如何なる場合に於ても物體とその運動とである。即ちプラトンが純希臘的なる語勢を以て表はした言ひ方に從へば、可視的な世界である。從てかの諸理念即ち概念的認識の客觀は、之と區別された獨自の實在、即ち不可視的にして非物質的な世界をあらはしてゐなくてはならない。」(9) 斯の如くプラトンに於ける理念は超越的な存在するものであつた。其の世界は永遠なる眞の存在、或は本體の世界である。そしてそれは經驗的存在の典型となり、其の規範となるところの諸規定を見出すより高き實在であつた。

此の本體の世界は、プラトンに於ては、其の統一者を善の理念に於て見出す。それは「一切の存在と知識との源泉である。本體の世界に於ける善の理念は、存在と認識との原因である。」(10) 彼にとつて善とは、事物の完成せる狀態又は目的を意味する。「善それ自體の概念は、全くたゞ絶對目的の概念であり、從て一個の本質的には形式的なる規定である。かかる普遍化に於てのみ、善の理念はやがて又生成の世界に對する規定力とも看做される。それは一切の生起の原因として考へられる世界目的の概念である。」(11) 善は一切のものの存在の理由である。そして善は價値である。それは當爲である。從て理念は價値と眞の存在との結合したものであると云ひ得やう。

「カントが彼の先驗哲學の基礎付けの場合に導いたものは、プラトンの理念學の創造に導いたところの同一な動機である」としたクロオナアは云ふ、「若し存在の認識が與へられなければならぬ、存在の認識が存在しなければならないならば、不動の或るものが變化する事物の中に存在しなければならない。そしてこの不動不變な或るものが、眞なる存在として觀察されなければならない。是れ即ち眞に判斷せらるるところのもの、普遍妥當的知識の對象になるものである。普遍妥當的判斷は普遍的對象の上にのみ下され、個々の事物の上には下されない。何となれば個々の事物の場合、其の變化と移動とに於ては合理的認識は生じないからである。眞理なるものは變化せずして永遠のものである。從て認識が眞たらんが爲めには永遠的なものでなければならない。それ故にプラトンが云ふ如く、眞なる存在、存在するところの存在するものは、概念の普遍性でなければならない。此の概念に就て知識は眞なるものを述べるのである。即ち一切の個別的事物の眞の本質を作り出すところの、此の存在するものをプラトンは理念と呼んだ。斯くて理念は判斷の論理的普遍概念であり、論理的主體である。」(12) 寔にカントはプラトンの觀念論を內部性の獨逸觀念論と結合せしめて、全然新たなる哲學の形成即ち先驗哲學を生んだのであつた。カントがプラトン的哲學の再來と呼ばれる所以は茲に存する。

「カントは論理的反省の中に根を有する觀念論の再起によつてプラトン的アリストテレス的理念の形而上學を導入し、而してそれを破壞すると同時に別の型で新たに形成した」(13) とクロオナアは云ふ。カントの排斥した形而上學は、壓倒的な自然科學の影響の下に發生せる新時代の形而上學なのであつた。此の意味に於てカントを形而上學の破壞者と呼び得るのである。彼はプラトンに新解釋を施したのであつた。それは認識の普遍妥當性の根據を、プラトンに於けるが如く超越的實在と認識內容との對應に求めないことであつた。之がカントに於ける思惟の先天的能力の批判である。彼は絶對的實在の認識を否定した。結驗のみが眞の存在である。そして理論的理性の活動形式に具

は先天的妥當性に、認識の普遍妥當性の根據を求めたのであつた。爰に於て彼以前の形而上學は破壞され、而して實在と價値とは各、獨立性を有するに至つたのである。價値が眞に價値たるのは、經驗的根據によるのではなく、一切の理性者によつて價値たることを承認され得べき性質を有するからである。かくてヴィンデルバントが云つた「カントの意味に於ける理念」は明かにせられるであらう。即ちそれは此のカントの批判に基くもの、即ちプラトンの理念から實在性を除いて殘るところの價値を意味する。それは當爲であり、課せられたものである。存在ではなく、與へられたものではないのであつた。

かかるプラトン解釋を發展せしめたのは、ヘルマン・ロッツェに於てであつたと人は云ふのである。そして其の人々の一人であるアルトウア・リイバアトの言葉を借りれば、「獨立の學としての純粹論理學の發展に對するロッツェの根本的意義に注意した最初の者はヴィンデルバントであつた」(14)のである。ロッツェの特徴は經驗的存在と論理的妥當とを區別したことである。そしてプラトンの理念に對する從來の形而上學的、超驗的解釋を排して、新たに論理的解釋を施したのであつた。即ちロッツェに於て理念の世界は論理的妥當の世界なのである。彼は存在と妥當とを次の如く區別する。曰く、「存在とは單なる現實在の王國を示す、之に反して妥當は常に、此の現實在の王國に關して下す論理的決定、存在に對して執る概念的態度を意味する。」(15) 即ち妥當は概念的規定の範圍、二つの內容の一致又は相違に就ての理論的決定の範圍を構成し特徴付けるのである。而してそれは其の基礎的意味が判斷の形式に於て現はれるのである。(16) 眞理、即ち妥當の世界は嚴密にまとまつた秩序（eine streng geschlossene Ordnung）であつて、存在の世界と同一ではないのである。然かもロッツェに於て此の妥當なる概念は自足的基礎概念なのであり、更に演繹されることは出來ないものである。ロッツェを其の師としたヴィンデルバントは、其の妥當概念を繼承し、之をカントの批判主義と結んで以て彼の價値哲學、又其の歴史哲學を特徴付けたのであつた。

理念、――カントの云ふ意味の――それは課せられたのみで實現され終ることなきものである。それは形式的にのみ與へられ、內容的には永遠の課題たるものである。吾々に方向を示すのみのものである。此の課せられた理念たる人類を、ヴィンデルバントに於ては歴史の問題とするのである。此の理念と概念との區別を、ヴィンデルバントの批判哲學は歴史の本質に關する批判的反省を行ふに際して取り上げるのであつた。此の區別によつて、自然的發達と歴史的發達との根本的差異を解するのであつた。彼の歴史的原理は實にかかる人類の理念であつたのである。彼は語る、「一の理性的全體意義の發達する生活統一としての人類は、生物學的類としての人類が事實上あるが如くに、決して完成せるものとして與へられるのではなく、それは常にたゞ課されるもの、然かも避くべからざる必然性を以て課されるのである。斯くて歴史は、此の人間性の課題が、種々變化するそして恐らく全體に於ては漸次に增大する度合に於て成就される過程である。生物學的な類的共同生活の自然的所與が、それによつて理性的生活統一に高めらるべきところの、人間に於ける生起は、非歴史的である。然かも縱令此の問題とする目標が脅かされてゐても此の結果に寄與するものを、又はたゞ之と關係を有するだけのものを、すべて歴史的と云ふのである。」(17)

ヴィンデルバントに於ける歴史的原理たる人類の理念は、統一化一般の意味に於て定立されることは云ふ迄もない。彼は云ふ「人類の理念に對して、一方に於ては民族及び國家が統一化の準備段階として、他方に於ては個人人格がすべて此等結合體の要素として考察されねばならない」(18)と。然かも彼にあつては、この人類の理念は更に理性的に規定された生活統一の意味に於て妥當せねばならぬといふのである。

個々の生起の背後に一般的にして内容的な諸關係、即ち理念を見出さうとすることは、亦ヴィンデルバントも求めたところであつた。即ち多様の中に統一を認め、以て全過程に對する個々の過程の意義を決定しようとすることを、彼は求めたのである。勿論統一を求めて、其處に最高且最後のものとして生ずる概念が、一般的であればある程、その概念は愈〻現實の歴史的事實からは遠ざかるであらう。寧ろそれは現實の個々の事實に於ては無意味なものにさへ見られるかも知れない。と云へ斯かる一般的原理であつてこそ、歴史的過程の概觀は可能なのであると云はねばならない。そしてヴィンデルバントは、繰り返へすまでもなく、その歴史的原理を人類の理念に求めたのであつた。「普遍的生活統一としての人類は課せられるのであつて、與へられるのではない。それは決して實現され得ない一の理念である。」(19)彼に於ける歴史は、「人類の概念から進んで人類の理念に至る」(20)ものであつた。そしてこの理念は、更に人格の統一といふ點からも推論し得るものでもあつた。それは如何にしてであるか。

(1) Windelband, Geschichtsphilosophie. S. 56.

(2) Windelband, Geschichtsphilosophie. S. 56.

(3) Windelband, Platon. 7. Aufl. 1923. S. 73.
ここにプラトンの認識論について特色ある學説たる、すべての概念的知識は想起(Erinnerung)であるとの説が發展するのである。

(4) Windelband, Platon. S. 78.

(5) Windelband, Platon. S. 78

(6) Windelband, Platon. S. 76.

(7) Windelband, Platon. S. 71.

(8) Windelband, Platon. S. 76.

(9) Windelband, Platon. S. 79
それ故にプラトンの哲學的思索の核心をなすものは二元論である。

(10) Windelband, Platon. S. 101.

(11) Windelband, Platon. S. 101.

(12) Richard Kroner, Von Kant bis Hegel. 1921. Bd. I. S. 36.

(13) Kroner, a. a. O. S. 40.

(14) Liebert, a. a. O. S. 204.

(15) Liebert, a. a. O. S. 206.
「若し私が此の存在を肯定し或は否定したならば、私は此の存在に對してその妥當を認める。此の妥當は判斷作用の意味である。それは一の命題を他の命題と區別して眞であるといふ概念的理論的表現である。」(Liebert, a. a. O. S. 206)

(16) Liebert; a. a. O. S. 206.
(17) Windelband, Geschichtsphilosophie. S. 57.
(18) Windelband, Geschichtsphilosophie. S. 63.
　彼は此の講義に於て此の前者のみを、然かも其れは未完成の形で殘してゐるのである。
(19) Windelband, Geschichtsphilosophie. S. 63.
(20) Windelband, Einleitung. S. 347.

九

自然的個別性は一切の有機物の有するところである。何れの有機物も皆、それぞれの反復すべからざる個性を現はしてゐる、それは物的特徴、心的特徴の孰れからしてもさうである、とは明らかに云ひ得ることであらう。之に對してヴィンデルバントは云ふのである、「吾々が一切の有機體を相ひ分つてゐる自然的個別性は、本來はたゞに一の客觀的個別性であり、他人に對し、他人の比較する判斷に對して、自己の形態であるものに過ぎない。それは決して自分自身に對する獨立的形態ではないのである」(1)と。如何なる事物も吾々が其等の特性に附與する特殊價値によつて、吾々に對して個別性となることは出來る。それは一切の有機物に於てさうである。然し斯の如きものは、何等それ自身に對する獨立的個性ではないのである。「獨立的個性はひとり人間が獲得するのみ、この故にこそ人間は人格（Person）と呼ばれるのである。從て人格性（Persönlichkeit）とはそれ自身客觀的となれる個性、それ自身に對する獨立的個性である。」(2) 從て亦すべての人間はそれぞれ個人(Individuen)ではあるけれど、すべてが悉く人格（Personen）ではないと云ひ得るであらう。

個性を有すること、それは必ずしも人格を有することではないのである。然らば、人間は如何にして人格を得るのであるか。ヴィンデルバントに據れば、人格を獲得するのは、自覺に基く。即ち自意識である。人間は自覺によつて自己の行爲を律する。自覺によつて個性は定立され、斯くて人格を生ずるのである。「自覺は個人のうちに自己批判として現はれる。そして人格が自己自身に對して採る自由な態度を決定するのである。」(3) 之は自律的人格性の自己反省、自己批判である。

此の自律的人格性は、其の自己批判によつて、規定部分即ち生の反省的な明瞭な層と、被規定部分即ち生の模糊たる感情の層とに分裂し、此の兩者は對立する。(フィヒテ)。後者は全體意識の根柢であり、前者は人格性が其の獨立の特異性を捕捉した場合の全體性の內容である。從て人格性が明瞭な層を全體意識（不明瞭な層）の支配に對立せしめ、之を外的行爲に現はせば、人格性は全體性に對立するに至るのである。この全體性に歴史的過程が基礎づけられてゐるのである。「人格性が全體意識の支配に對して自己の特異性の把捉を明瞭にし、そして外部的行爲のうちに發露せしめらるゝ場合には、忽ちにして其の人格性は、歴史的過程が基礎づけられてゐるところの全體性に對して、對抗の姿を以て現はれて來る。」(4) 全體意識が個人人格の先導によつて、其の模糊たる狀態から發展して明瞭にして自由な精神の狀態に至るのが、人間の歴史の全體の意味なのである。それ故に「人格性の本質は、個人が種族の單なる一見本たるよりも以上のものでなければならぬといふ所に存するのである」と云つたヴィンデルバントは、茲に人間の歴史の本質の端緒を見出したのであつた。人間の自覺の自律性が、人間の歴史を說くに當つての前提たるべきものであつたのである。人間は、

歴史のうちに於て其の自律的人格を活動せしめるのである。ヴィンデルバントに於ての歴史的過程の特徴は、人格性と全體性との間の相互的緊張、「個人と全體との間の緊張の高揚（Der gesamte historische Prozess ist die Steigerung der Spannung zwischen Individuum und Gesamtheit.）」(5)であつた。この緊張は人格の作用に基くのである。そしてそれこそ「特に人間的なるもの（das spezifische Menschliche）」と云はねばならない。それが、ヴィンデルバントにとつて、歴史なのである。

從て、「一切の歴史は人間の全體運動であり、歴史の意味は全體生活の變化に存すると主張する解釋」、及び之に對立するものと看做されるところの「個人殊に偉大なる個人の活動から出づる創造的活動を强調する歴史解釋」は、各〻正當さを有するものではあるけれど、尙其れは一面性を語るものに過ぎぬが故に、ヴィンデルバントにあつて許容し得ぬ見解となるのである。即ち前者に於ては、「人格を、全體過程が其處に凝集し又時と共に離散して行く瞬時的現象としてのみ取扱ひ」、人格をば恰も單に個人に過ぎないものとして個人の影響の重要性を見ざるが爲めに、後者は「個人の活動のうちに全體性の力が共に働いてゐること、及び其處からのみ英雄の業績が齎らす活動の廣大にして持續的なる所以も說明さるべきであるといふことを看過する怖れがある」が爲めに、約言すれば各〻の解釋は其の一面性の故に、ヴィンデルバントは之を採らないのである。それは孰れも「其の一面性の爲めに、人格性と全體性との間の相互的緊張の理解を逸して了ふ」ものである。然かも、これこそ、この相互の緊張こそ人類の歴史に於ける最も重要な點なのである。「そしてそれが爲めに、歴史的發展の意味をなす諸生活秩序の形成に於ける本質的なるものを、洞見せんとする眼を自ら曇らせて了ふのである。」(6)

斯くの如く、ヴィンデルバントに於て、歴史的に有意義のものは、曖昧不明なる諸種の特異性ではなくして、個人人格の仕事である。人格の作用である。「個人人格はそれが反省的なる明瞭性へ向つて進めば進む程、自己自身のうちには其の生來自然的素質であつた單なる個人的要素を益〻否定し去つて行く。斯くて人格性と全體性との間に於ける斯かる全緊張は、遂に辯證法的の終結に達するに至り、個人が得ることの出來る一切の最高のもの及び最も價値あるものは、それ自身に何等か非個人的又超個人的のものを有することとなるのである。」爰に於て「個人人格は、自ら自己以上のものであることによつて、自らの歴史的意義を獲得するのである。」(7) 斯くて有意義な人格の本質とは、「個人人格がその中に超個人的價値を展開し之を外界に形成するといふこと」に外ならないのである。

云ふまでもなく、斯かる價値は、其の價値を有する個性のうちに生來自然的に與へられた諸制約から獨立のものである。換言すれば、「かかる價値は、種々なる時間的動因（zeitlichen Anlässen）から獨立の、即ち永遠の妥當性を有する。」(8) 從てこのことは亦前述せるところに當嵌めて、全體と個人との歴史的緊張からは、個人人格の活動によつて永遠の價値が生れ出ると云ひ得るであらう。茲に個人人格の統一が見られるのである。人格の統一は自然的に與へられたものでもなく、豫じめ存してゐたものでもないのであるが、かかる價値を得んとする努力に於て、其の自律性の故に統一するのである。人間の理性活動は一切の經驗的制約を征服することに努力する。其の理性は個々の主

觀的立場をすべて統一する。玆に人間は理性秩序の下に於て統一されるといはねばならない。それは自覺的統一である。然かも尙それは人類統一の理念なのである。そしてそれが歴史の理念なのである。

（1）Windelband, Einleitung. S. 337.
（2）Windelband, Einleitung. S.337.
（3）Windelband, Einleitung. S. 338-9.
（4）Windelband, Einleitung. S. 339.
（5）Windelband, Einleitung. S. 303.
（6）Windelband, Einleitung. S. 342.
（7）Windelband, Einleitung. S. 343-4.
（8）Windelband, Einleitung. S. 344.

十

前述せる如く歴史的過程からは、個人人格の活動によつて永遠の價値が生れ出る。此の價値に就て、筆者は述べねばならない。それは彼の云ふ歴史にとつて、最も肝要なものであるから。

カントを繼ぎロッツェを承けたヴィンデルバントに於て、價値は、既に見來つた如く、存在に對立する超越的なものであり、（1）（2）經驗的存在を成立せしめる根源であつた。即ち價値の世界は理念のそれである。人間は、此の價値を實現せんとして努力するのである。從て斯く努力する人間にとつては、それは規範たるもの、當爲たるものと云はねばならない。即ち、すでに規範とは現實的に存在するものではなく、妥當するものであるからには、此の妥當的價値の世界は永遠に當爲の世界として人間に對して現はれると云はねばならない。然かも此の妥當的なるものを現實的なるものの中に引き入れんと努力するところに、人間の生活の意義は在るのである。此の實現が人間の活動の理想なのである。それが人類の歴史的生活なのである。從て人類の歴史的生活は目的實現の過程でなければならない。

既述の如く玆に人類は統一される。寧ろそれは統一されざるを得ないのである。そして此の人類の統一を歴史は理念とするのである。それは課されたもの、而して自覺に於て、人格の活動に於てのみ、其の方向に向けられ得るものである。此の永遠の價値は究竟に於て實現され得ぬものであるけれど、然かも此の目的實現の爲めの自覺的統一に於て人類の歴史は發展すると云はねばならない。價値實現の過程として、歴史的生活は發展するのである。「人類の生活統一の理想は、人類の一切の理性的活動の上に擴がつて行く。表象の領域には學問、感情の領域には藝術、意欲に於ては道德性、行爲に於ては國家及び社會の組織が發生する。すべて斯の如き文化形式に於て、個々の民族及び時代は彼等の特殊な體系を創造して行く。然かも此等の體系は夫々常に自己自身を越えて一般人間的のものを指し、人間性の實現を指示する。その場合に個人人格はかかる關聯を常に意識の中に甦らせ斯くして之を完成し固定せしむることを以て天職とするのであるが、之こそは個人人格の使命なのである。」（3）從て人格は價値實現の目的に對する手段たるものである。然かも此の目的は決して達し得ざるものであるからには、その活動によつて人格から生れ出る價値は合目的性を核心とする手段としての價値であると云はねばならないであらう。

ヴィンデルバントに於ては、人類統一の理念が歴史的發展のそれである。そして人類の自己の形成が歴史的進步の最後の意味である。「この價値判斷規準があつて始めて、沒價値的認識に呈示される諸變化に進步又は退步の意義は與へられることが出來るのである。」（4）

ヴィンデルバントの歴史哲學の第二の課題は、從て本稿後半の課題は此の略述を以て終へよう。此の問題に對する彼の思索にはロッツェとフィッシャア、殊に後者の思想の影響が多く見られることは既に一言した。價値に向つての發展過程を說いたことがそれである。端的に云へば、ヴィンデルバントに於て歴史は價値實現であつた。彼は語る「全體としての人類の實現は、民族や國家の裡にでなく歴史の裡に行はれる」（5）と。然かも彼の哲學が世界觀の學である（6）ことは、玆に當然、總體の關係、全

體に對する個の意味を見出し、發展の發端と終局とを理解することに其の力を注がしめたのであつた。「吾々の意味深き人生の多樣性を統一的に理解すること」(7)を追ひ求めたのであつた。歴史を内面的に解せんとして、最高の統一から全體を見ることは、以上の如くして、ヴィンデルバントによつて成し遂げられたのであつた。そして又彼の哲學が價値概念によつてオリエンテイレンされるものであることは、此の歴史哲學に對する瞥見を以て十分に窺ひ得るところであらう。

猶、例へば價値に就て、妥當に就て、(8)或は「個性の最も卓越した點は藝術的に體驗されるのみ」(9)と云つたところに就て、述ぶべき多くのことを筆者は持つ。然かもヴィンデルバントの歴史哲學の一斑を描くことを以て本稿の目的は充ち足りるとするが故に、彼の理説は決して以上述べ來つたもののみでないことを、當然のことながら附言して此の稿を終りたく思ふ。

（1）此の價値は絶對的妥當を形式とする價値である。

（2）謂ゆる二世界説の成立は、ここに胚胎するのであるが、本稿に於てこの記述は省略する。

（3）Windelband, Einleitung. S. 349-50.

（4）Windelband, Einleitung. S. 350.

（5）Windelband, Einleitung. S. 332.

（6）Windelband, Einleitung. S. 19.

（7）Rickert, Windelband. S. 20.

（8）Vgl. Georg Daniels, Das Geltungsproblem in Windelbands Philosophie. 1929.

（9）Vgl. Windelband, Einleitung. S. 63.

（六・十一・二十八・稿了）

Irving Fisher; "The Theory of Interest"

氣賀健三

亞米利加のエール大學教授アービング・フィシャー氏は一九三〇年 "The Theory of Interest" (註一)なる一書を著して之を世に問ふた。此書は嘗て一九〇七年同じ著者に依つて "The Rate of Interest" (註二)の題名の下に著されたる書物の改訂版とも言ふ可きものである。氏は舊著に對して加へられたる種々の批評に鑑み、新著に於て此等の批評に答へて以て氏の説に對する誤解や疑惑を一掃すると共に、新に豐富なる材料を以て新に其學説を一層明瞭に敍述せんと試みたのである。

註一　The Theory of Interest, 1930, Macmillan C. New York

註二　The Rate of Interest, 1907, Macmillan C. New York

惟ふに資本又は資本利子なる言葉は吾人の日常の經濟生活に於て頗る頻繁に然かも頗る漠然と用ひらるゝ言葉の一つに屬するものであるので、經濟學に於て用ひらるゝ資本の概念に就て、古くアダム・スミスの昔より夥しき論爭の渦が之を取卷いて居る。

フィッシャーは其新著の序論(第一部)に於て先づ、以下に論ぜらる可き資本並に利子歩合の概念を定義して其理論的出發點を明確に規定する。(第一章―第三章)、次いで第四章から第九章まで（第二部）は其重要題目たる利子歩合の決定に關する理論的説明に充てられて居る、之に次いで第十章よ